▼作品情報
作品タイトル：ミルク・クラウン
▼作者情報
作者：花　千世子

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

1．ミルク部

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

　3階に来るのは、ほとんど初めてだった。

廊下の1番隅に喧騒から取り残されたような、小さな教室がある。

外から見た雰囲気では、空き教室というよりは倉庫とか資料室とかそういう類のものだろう。

その小さな教室のドアには紙が貼ってあった。

やけにきれいな字で『ミルク部』と書かれてある。

紙の下に、うっすら『音楽準備室Ⅱ』というプレートが透けて見えた。

「本当に『ミルク部』なんだ。ってゆーか、ミルク部ってなに？」

私がそう呟いた時。

「それじゃあ、我がミルク部とはなにか。説明しよう！」

背後から聞こえた声があまりにも不意打ちで、本当の意味で飛び上がった。

振り返ると男子が立っていて、なぜか男子は私の顔を見るなり目をまん丸くする。

それから、しばらく黙りこんだ。

えっ、なに？

訳がわからない私をよそに、その男子は目をキョロキョロと泳がせ、俯いたり、「あー、えーーーっと」とか言っている。

その姿を見て、男子に敵意がないのがなんとなくわかった。

先ほどの発言――「それじゃあ、我がミルク部とはなにか。説明しよう！」を聞く限り、ミルク部の部員なのだろう。

部員勧誘をして、ついでについでにナンパでもしようかな、と考えたけど振り返った自分が、地味でさえない女子だったから、ガッカリした。

きっとそうに違いない。

なんて失礼な。

私はそこまで考えて、勝手にイラッとする。

被害妄想だということは重々承知していた。

でも、貴重な放課後を――たとえ用事がなくても、いや、ヒトカラという立派な用事もあるし、家でスマホのゲームしたりアニメ観たりしてダラダラもしたい。

そんな時間を台無しにされたのだ。

これが一八汐《やしお》先生からの頼まれ事でなければ、こんなところには来なかった。

私が今すぐにダッシュで家へと走らないのは、先生が私のことを心配しているのを知っているから。

だから私は、こんな辺境の地へとわざわざやって来たのだ。

はあ、とため息を１つ。

この『ミルク部』に来ることになったのは、今日の昼休みまでさかのぼる。

職員室と書いて『パラダイス』と読む。

中学までは『職員室はできれば行きたくない・近づきたくない・呼び出されたくない』の三拍子がそろっていた。

だけど高校になった今、職員室にいる時の私はついつい頬が緩んでしまう。

教室では決して見せない良い笑顔をしていることだろう。

「……なにニヤニヤしてるんだ」

低いけれど聞き取りやすい声でそう言ったのは、担任教師の一八汐与一《やしおよいち》先生だ。

体育教師特有の年中日に焼けた肌に、黒髪短髪、キリリとした目元によくよく見ると整った顔立ちは時代劇の俳優っぽい。

ジャージを着ていてもわかる適度に筋肉のついた体は逞しくて、男としての色気全開。

いつも怒ったような顔をしていて、眉間に皺が寄っているのがデフォルトの表情なところも好き。

表情が読めないってミステリアスだよね。

こんなふうに近くで先生の顔が見られるうれしさで、私は口を開く。

「先生って、確か３５歳ですよね」

「ああ。今年で３６だが、だからなんだ」

「先生って独身でしたよね？」

私が首を傾げて聞いてみると、「結婚はしていないが、今はそれは関係ないだろう」と不思議そうな顔をされた。

私はとびきりスマイルでこう聞いてみる。

「１６歳の女子は興味ないですか？」

「生徒として興味はある」

「女性としては？」

私がそう聞くと先生は、鼻で笑って一言。

「女性、ねえ……」

「あと４年ぐらいしたらびっくりするほどきれいになりますよ」

「それで、だ。―知立《ちりゅう》。お前をここに呼び出したのには理由があってだな」

「スルーですか？　まあ、確かに私、４年後にきれいになってそうもないですが！」

泣きそうな勢いで先生に訴えてみる。

「知立は、確か部活に入っていないよな」

「……全スルー」

「電車通学や自転車通学で遠いところから通学している生徒はしかたないが、知立は徒歩だろ」

「そうですよ。歩いて学校まで１５分くらいです」

「そうか。じゃあ尚更、部活に入ったほうがいいな」

先生は大きく頷いて、それから続ける。

「今日の放課後、３階の廊下の突き当りの教室を覗いてみてくれ。そこが『ミルク部』だそうだ」

『ミルク部』？　なんですかそれ？　私、別に牛乳はそんなに好きってわけじゃないです

が」

「三階の階段のすぐそば、左手にある」

「調理室ではないんですね」

「ああ、うん。まあ、覗くだけ覗いてみてもいいんじゃないか、って話だ」

「えー。私、放課後はそれなりに忙しいんですよ。予定が色々と入ってますしー」

「……そうか」

先生は急に哀れむような目で私を見た。

「ちょっ！　そんな目で見るのはやめてください！　予定が入ってるのも忙しいのも冗談です！」

「ああ、わかってる」

先生は真面目な顔で頷いて、「予定が入っている、が本当だったら俺は別に心配しないんだが」と小声で言った。

なんだか心配してくれることが申し訳ないような、そうやって私のことを真剣に考えてくれるのがうれしいような。

ちょっぴり複雑な気持ちになって、黙りこんでしまう。

「そういうわけで、用事はそれだけだ」

先生はそう言い終えると、机の上のカップラーメンにちらりと視線を向ける。

私は思わずこう聞いていた。

「カップラーメンだけなんですか、お昼」

「今日は弁当を忘れてな」

「そうなんですか」

弁当って、コンビニ弁当かなあ、でも忘れたってことは手作り弁当だよね。

先生が料理するのかなあ。

それとも彼女が……。

そこまで考えて、私は頭を左右にぷるぷると振った。

自分の胸が痛くなる妄想をする前にその場を立ち去ろうとする。

すると、先生に「知立」と呼ばれて立ち止まった。

「なんでしょう？」

「４年後、知立はすてきな大人になってるんじゃないか」

「えっ？」

「今のところその可能性は……５０％くらいってとこか」

先生はそう言ってカップラーメンに視線を向けたまま、少しだけ笑った。

えっ？　今のもしかしてフォロー？

さっき私が適当にぼやいた『あと４年ぐらいしたらびっくりするくらいにきれいになりますよ』のフォローしてくれたの？

うれしいいいい。

だから先生大好きーーーー。

私はご機嫌で職員室を出て、廊下を歩きながらふと思い出す。

「可能性が５０％、ってどういう意味だよ」

失礼な！

……なーんて、まあ、「可能性が５０％」ってのも先生の照れ隠しの冗談で、先生は私のこと気にかけてくれてるんだよね。

そうじゃなきゃフォローなんかしてくれない。

こうしてお昼休みに呼び出して、自分のカップラーメン伸びるのもかまわずに私を相手にしてくれる。

それだけで、先生は私のことを気にかけてくれているのはよくわかるんだ。

部活を勧められたことは少し意外ではあったけれども。

しかもミルク部ときた。

ってゆーかミルク部ってなんだよ。

それでも、先生が私のことを心配してくれているのは伝わる。

たぶん、高校入学から一ヶ月でここまで心配される生徒も初めてなのかもしれない。

まあ、それもこれも自業自得ではあるんだけども。

がらり、と一年一組の教室のドアを開けると、騒がしい音が耳に流れこんでくる。

一番前を陣取っている女子グループの１つがこちらを見た。

それから、ヒソヒソと何かを話し出す。

女子たちの表情からは、容易に悪意が読み取れる。

もう少し隠せばいいのになあ。

そんなことを思いながら、そのグループの近くを通ると、一人の女子がぽつりと呟く。

「まーた先生に泣きついたんだ？」

それに続いて別の女子も口を開く。

「ほら、知立って八汐好きじゃん。趣味悪いよねー」

「かわいくないからって、おっさんに走るだなんて、かわいそー」

クスクスという笑い声。

聞こえるように放たれた悪口。

私に向けられた、まっすぐな悪意。

……だからなんだというんだ。

正直、悪口を言われようがかまわない。

お昼休みにぼっちでもかまわない。

私はクラスメイトのことなんて――特に悪口を言ってくる奴らに好かれようだなんて思わない。

どうぞ、何でも言っていてくれ。

私が何よりも傷つくのは、八汐先生から見放されたり、嫌われたりしてしまうことだ。

ただそれだけ。

ああ、あと家族がいなくなったり、猫たちが元気じゃなくなったり、家でゴロゴロできなくなったり。

そういうことができなくならないなら、それでいい。

無理にこんなクラスで、友だちをつくる必要なんかないんだ。

私は自分の席につき、カフェオレのパックにストローを勢いよく刺す。

今日のお昼は母の特製弁当。おにぎりはしっとりで。メインはミニハンバーグ(昨夜のハンバーグのタネの余り)

「ぼっち飯で虚しくなんないのかなー」

まだ楽しそうに悪口を言っている女子たち、奴らは一明井歩乃《あくいあるの》率いるグループだ。

窓際の私にこの悪口が聞こえてくるんだから、当然、他の女子にも聞こえている。

他の女子は、<あの日>以来、私に関わろうとしない。

それはしょうがないし、予想できたことだ。

でも、こんなふうに悪口を言っていることで、クラスの男子へのイメージが悪くなる、とかは思わないんだろうか。

私はあいつらが言っていたように、おじさん好きだからクラスの男子のイメージもなにも興味がないわけだけど。

お前らは同級生くらいの年齢の男子に興味があるんでしょ。

お気に入りの男子が、一人の女子にネチネチ悪口を言っているのを聞いて『あの子、性格いいな』とか思うか？

いや、思わないだろう。

まあ、私だって別に性格がいいわけでもないし、むしろ面倒くさい奴だという自覚はある。

あの時、あんなふうにでしゃばるんじゃなかった。

もっとうまいやりかたで、解決するべきだったんだ。
そう思うほどには、私は自分が感情的になってしまう自覚がある。
ちらりと、教室の真ん中の列の一番前の席に視線を向けた。
空っぽの席がそこにはある。
そんなわけで、いつも通りのぼっちな学校生活を終えたのだ。
今日は八汐先生と会話ができるという、うれしいハプニングがあった。
この浮かれた気持ちのままで、いつもの店でヒトカラをしてストレス発散したい。
だけど、先生がせっかく勧めてくれた『ミルク部』とやらにも一応、顔だけは出してみよう。
そう思って来てみたら、目の前の男子は私の顔を見てあからさまに動揺して(失礼だ)いる。
散々、おろおろしてから、男子はこほん、とわざとらしい咳払い。
それから背筋をピンと伸ばし、にこりと微笑んだ。
「はじめまして。２年１組の一高原潮《たかはらうしお》です」
「……私は１年１組の一知立春香《ちりゅうはるか》です。はじめまして」
つられて自己紹介をしてしまったけども、私はこの人と関わるつもりはない。
というか、『ミルク部』とかいう謎の部活に入部するつもりはないのだ。
「ここにいたってことは、入部……いや、見学かな？　それとも吹奏楽部の人かな」
「いいえ、」
私はそこで言葉を切り、どう答えようかと悩んだ。

「ああ、じゃあ、見ていくだけ見ていって」

私があまりにも悩んでいるのがわかったのだろう。

高原先輩は穏やかにこう付け加える。

「帰りたくなったらいつもで帰っていいからさ」

そう言い終えると、先輩は音楽準備室の鍵を開け始める。

正直、余計に帰りにくくなった。

この様子だと、部員はとても少ないのだろう。

そうなると新入部員の獲得に必死なはずだ。

だけど、高原先輩からはそういうガツガツした雰囲気は感じない。

穏やかだけど、どこかあきらめているような、悲しそうな顔をしている。

ここで私が、「じゃあ、帰りまーす」と言っても先輩は引き止めたり責めたりはしないだろう。

でも、こんなふうに寂しそうだとむしろ立ち去りにくい。

そういう作戦か？

そうして立ち去りにくくして、入部までもっていこうとしているとか？

私が考えこんでいると、部屋のドアが開き、「どうぞ」と先輩が先に中に入れてくれた。

部屋に一歩足を踏み入れると、やけに埃っぽい。

中は6畳ほどのスペースの倉庫といった雰囲気だ。

中央には長机が２つ並べてくっつけて置かれてあり、４人分のパイプ椅子が机を囲んでいる。

１つだけある窓側の壁際には、ホワイトボード。

ホワイトボードの文字はきれいに消されていたけど、何かを書いた形跡があった。

そして、ホワイトボードの真向いの壁際には吹奏楽部の物らしき楽器がいくつか置いてある。

楽器はまだ真新しく見えたものの、埃をかぶっていた。

吹奏楽部が楽器を置かせてもらっているのではなく、ミルク部がいさせてもらっている、というのがよくわかる。

私が辺りをキョロキョロと見回していると、高原先輩が椅子に腰かけた。

それから私に向かいの椅子を勧めてくる。

座るだけなら、まあいいか。

そんなふうに私が腰かけると、高原先輩はこう聞いてきた。

「知立さんって、栃木出身じゃないよね」

「えっ？　なんでわかるんですか？」

「あ、うん。それは、こっちのなまりがないからね」

「言われてみれば確かにそうですね」

「出身はどこなの？」

「愛知です」

「へー。愛知。また遠いところからはるばる来たんだねえ」

高原先輩は何度も頷いて、「愛知かあ」と呟く。

私は思わず先輩の顔をちらりと盗み見た。

彼はどちらかと言えばイケメンの部類だとは思う。

一重の涼し気な目に、鼻筋が通っていて、真っ黒で少し猫っ毛の髪の毛は彼の肌の白さを強調している。

やや痩せ気味の体型に紺色のブレザーがよく似合う。

しかも全体的にやさしい雰囲気で、落ち着いた口調で話してくれるので安心感がある。

まあ、八汐先生には敵わないけどね。

「愛知のどこ出身なの？」

高原先輩がふと質問をしてきた。

「出身は一岡崎《おかざき》市です」

「あっ。聞いたことある。どういう漢字？」

「ええっと、岡崎の岡は……」

「ちょっとまってて、書くものあるから」

先輩はそう言うと自分のスクールバッグを開け、1枚の紙を取り出す。

その真っ白な紙を見た時、どこか違和感を覚えた。

この紙、なんか変だなと思いつつも渡されたボールペンで『岡崎』と書く。

「あー。こういう漢字かあ」

先輩は「知ってる知ってる」と一人で頷いてから、さらに続ける。

「ちなみに、知立って苗字も珍しいよね。どういう漢字？」

「ええっと、それは……」

私が自分の苗字を書こうとすると、先輩は「この辺に書いて」と指定してきた。

真っ白な紙で余白はたっぷりあるというのに、なぜ場所を指定されるんだろう。

そう思いつつ、私は『知立』という漢字を書いて見せる。

「あ、下の名前も」

なぜかそう言われ、深く考えもせずに『春香』と付け足す。

書き終えてボールペンを先輩に返すと、彼は私の名前を書いた紙をじっと見つめる。

それから、眩しいくらいの笑顔でこう言う。

「うん。春香ちゃんか。いい名前だね。しかも栃木っぽいし」

どこが栃木っぽいんだろう。

そう思ったものの、私は名前を褒められてうれしかった。

この部活に先輩がどうしても入部してくれ、と言うのなら、入ることを前向きに考えてもいいかな。

そう考えたところでふと聞いてみた。

「ここってどのくらい部員がいるんですか？」

「ん？　今のところ僕だけだよ」

予想以上にヤバめの部活だった。

やっぱり部屋の中まで入るのは良くなかったかも。

もう部員だとか言われてもおかしくないし。

もしかしたら、こうして私の警戒心をなくして入部させる魂胆かもしれない。

そんなことを考えていると、高原先輩が立ち上がる。

「さて、今日は解散」

「えっ？」

「実は僕、今日はちょっと大事な用事があってね」

「そうなんですか」

「うん。一応、見学者とか入部希望者とかいないかなあと思ってここに来てみたら君がいたってわけ」

先輩はスクールバッグを肩にかけ、椅子をしまう。

私も慌てて立ち上がり、先輩の後に続く。

音楽準備室Ⅱの教室を出ると、先輩はやさしい笑顔を浮かべたままこう言う。

「じゃあ、今日はありがとう」

「いいえ、私は特に何もしていませんし……」

「そんなことないよ」

去り際、そう言った先輩がニヤリと笑ったのは、気のせいだろうか。

ついでに、なんとなくあの人にはどこかで会ったことがあるような気もする。

これも気のせいかな。

小さくなっていく背中を眺めながら、首を傾げる。

まあ、なんでもいいや！

早く帰ろ帰ろ。

思いのほか、早く終わったし勧誘もされなかったし。

明日からここに来なければいい話だ。

もう高原先輩とも『ミルク部』とも関わることはないだろう。

ヒトカラで２時間ほど歌ってから、家に帰った。

家に帰るなり、私は自室にこもった。

部屋着に着替えると勉強机の上のパソコンを立ち上げる。

私は無意識のうちにネットの地図を開く。

画面に映し出されていたのは、実際の写真で住宅街の景色。

少し道を進めば、畑と田んぼの広がるのどかな景色。

さらに進むと、冬には霜柱を踏みつけた小さな丘のあるＴ字路。

このＴ字路の突き当りにあるクリーニング屋さんが開いているのは見たことがない。

そこからさらに進み、左に曲がって、先を進めば、左手に見えてくるのは小学校。

「懐かしいなあ」

そう呟いて画面の中の景色をしばらく眺める。

この小学校は、栃木ではない。

愛知の私が通っていた小学校だ。

小学校６年生まで愛知の小学校で、父の仕事の都合で栃木の那須に引っ越してきた。

私もまあまあ田舎で育ったと思ったけれど。

那須のほうがさらに上をいく田舎度合いだった。

こっちは見渡す限りの田園風景に、壮大な山が間近にある。

別に田舎なのはしょうがないことだ。

だけど、私が未練がましく愛知の景色を見てしまうのは、地元愛が強いというわけではない。

そもそも別に小学校はすごく楽しかったわけでもなかったから。

ただ、栃木に来てから、つまり中学３年間の記憶がほぼないのだ。

大まかに覚えてはいるものの細かいことは覚えていない。

それは私が中学は暗黒時代だったと自覚していたからだ。

端的に言えば、中学もぼっちだった。

そして、高校も中学と同じように暗黒時代というぼっちの生活が始まる。

今日、高原先輩が『なまっていない』と言ったのは、それは当然だ。

だってこっちで私は友だちができていないのだから。

喋る相手がいなければ、栃木弁だってなまりだってうつらない。

それに別に私は栃木に染まるつもりはないのだ。

高校を卒業したら、絶対に栃木を出る。

大学は埼玉か、できれば東京のほうへ行きたい。

関東で働いて、それから愛知に戻る、というプランを脳内で立てている。

とにかく栃木で腰を落ち着けるつもりも、ましてや骨をうずめるつもりもないのだ。

「知立」

その声は、振り返らなくてもわかる。

放課後の騒がしい喧騒から取り残されているような廊下の隅だからこそ、この低い声はよく聞き取れるのだ。

職員室のすぐそばにある自動販売機に、私がイチゴミルクを買いにくるのは、イチゴミルクが好きだから。

……なんて単純な理由なんかじゃなくて。

八汐先生に偶然でも会えたらいいな。

少しだけでも目が合えばいいな。

できたら話がしたいな。

そんな気持ちがあるから、ここまで来るのだ。

だけど今日は先生のほうから話しかけてきてくれた。

昨日はお昼休みに職員室に呼び出されて、今日は放課後に先生が呼び止めてくれた。

これはもう私と先生、両思いなのでは？

そんな飛躍し過ぎの妄想をしながら、とびきりの笑顔で振り返る。

先生はこちらに駆け寄ってきて、デフォルトの怒ったような顔で聞いてきた。

「帰るのか」

「先生が私ともっといたいって言うなら帰りませんよ」

「今日は部活はないのか？」

「華麗なスルー。まあいつものことですけど……って、部活？」

「そう。今日はないのか」

「ないもなにも、入部してないですし」

私がそう答えると、先生は困ったように眉間の皺をさらに深くさせる。

それから右手に持っていた白い紙を、こちらに見せてきた。

よくよく見ると、それは入部届でミルク部へ入部する旨が書かれてある。

私の名前が書いてあった。

こんなもの書いた覚えはないけど、でも、紛れもなくこれは私の字。

ふと、余白に『岡崎』という文字も書かれてあった。

これは私が昨日、高原先輩に出身地を説明した時に書いたものだ。

紙が変だな、と思っていた。

今思えば、不自然な線が見えていた気もする。

「これ、誰が持ってきたんですか？」

「高原だよ。昨日、知立は用事があるからって自分が代理で届けに来たって」

そこまで聞いて、私は走り出していた。

背中のほうから聞こえた『走るなー』の先生の声は、なぜかいつもよりずっと優しい。

私は走るのをやめ、早歩きをしながら鼻息を荒くする。

あんの先輩！

虫も殺さないような顔と雰囲気かもし出していると思っていたけど、真逆だった！

私に入部届に名前を書かせるために、出身地と名前を聞いたんだ。

きれいな名前だね、って笑ったのも全部うそかよ！

そう思うと悔しいような、腹立たしいような。

私は怒りをこめて、大股で廊下を歩く。

もちろん目指すは三階の音楽準備室Ⅱだ。

勢いよく音楽準備室Ⅱのドアを開けると、私は高原先輩を睨みつける。

彼は笑顔で「ああ、知立さん。来てくれたんだね」と言い、視線を長机に向けた。

つられて長机の上を見て、私はぎょっとする。

そこにはありとあらゆるお菓子があったのだ。

ポテチ、チョコレート、クッキー、シュークリームにマカロン、菓子パンまである。

大量のお菓子のせいで机は埋まってしまっていた。

なんだこれは……。

私が入部したお祝いとでも言いたいのか？

変な工作して入部届に名前書かせて、おまけに八汐先生まで騙して！

「どういうことですか？」

私は怒りを抑えつつ、聞いてみる。

冷静にならないと、何だかやりこめられてしまいそうだ。

先輩は、笑顔を絶やさないまま答える。

「どういうって、このお菓子は全部、牛乳に合うお菓子だよ」

「お菓子の話じゃありませんよ」

「ポテチとかしょっぱい系も牛乳には合うからね。万能な飲み物なんだよ」

「そうじゃなくて！　私、入部してないんですけど！」

「でも、入部届に名前を書いてくれたよね」

「あれは、入部届じゃないですよ。普通の紙でした。だから無効です」

私の言葉に、先輩はさっと何かを取り出す。

その紙は真っ白だけど、よく見ると四角く切り取られているところが２カ所ある。

「知立さん、君は昨日、この紙に名前を書いたと思っていたんだろう？」

「はい。そのつもりでしたよ」

「でも、この四角く切り取ってあるところに君は文字を書いていたんだ」

「どういうことですか」

「この紙の下には入部届を敷いておいた。僕がつくったんだよ」

「えっ。じゃあ」

「そう。知立さんは、自分から入部届に名前を書いていたんだ」

「へー。じゃあ、しょうがないですね！」

私はそこでにこっと笑って、高原先輩に思いきり近づく。

「……ってなると思いますか？」

「いや、それは」

先輩は視線を明後日の方向へとそらす。

「ないですよね？　ありえないですよね？」

「名前を書かせちゃえばこっちのものかなーと」

「そんな、ストーカーが女性に婚姻届けを書かせるみたいな手段を入部届けでつかわないでください」

「うわあ、それはこわいなあ」

「それはこっちの台詞です！」

私はそう叫んでため息を一つ。

「こんなふうに勧誘ってゆーか、騙して入部させるみたいな手口だから部員が集まらないんですよ」

「大丈夫。この方法をつかったのは知立さんが初めてだから」

「なにも大丈夫じゃないし、私を実験台にしないでください！」

「いやー。思ったよりもあっさり騙されてくれるもんだなあと感動すらしたよ」

「そりゃあ、そこまで偽装工作して入部届に名前を書かせるとは誰も予想できないからです！」

「あ、でもさすがにこれは僕のアイデアじゃない。ある有名な漫画の方法で――」

「それ以上、言わないでください。私もうっすら気づいていますから」

私の言葉に、高原先輩はこほんと咳払いをしてから言う。

「まあ、別に本当に入部してくれなくてもいいよ」

「えっ？」

「ほら、名前だけ貸してくれて幽霊部員になってくれてもいいし」

「結局、先輩一人じゃないですか」

「いいよ。僕は『ミルク部』がつくりたいだけだから。入部したいっていう人をこれから探せばいい」

「でも、『ミルク部』なんて活動内容がわからない部活、誰も入部したがりませんよ」

「そうかなあ。僕は最高の部活だと思うけどね」

先輩はにっこりと笑って続ける。

「それに、一人なら一人でもいいよ」

そう言った先輩はどこか寂しそうに見えた。

私は先輩をぎろりと睨みつけ、こう聞いてみる。

「その寂しそうな顔は演技ですか？」

「えっ？　寂しそうな顔なんかしてないって」

先輩は、「はは、どうせ1人だけの部活になるのは覚悟してたんだよ」と私に背中を向ける。

そして俯いて、力なくこう言う。

「ごめん。騙して。いいよ。名前を貸すのも嫌なら、あの入部届はなかったことにする」

「……名前ぐらいなら別に……」

「いや、いいんだ。こんなふうに部活をつくるなんて、やっぱり間違ってる」

先輩がこちらを振り返り、「本当にごめん」と弱々しい声で謝る。

その瞳には、一粒の光る雫。

えっ？　泣いてる？

そこまでしてミルク部をつくりたいの？

牛乳への異常な執着心があるってこと？

それとも、牛乳を囲んでみんなで楽しくワイワイ騒ぎたいだけ？

そこまで考えて、私は長机に視線を向けた。

たくさんのお菓子。

先輩が全部、用意したんだろう。

もしかして、先輩もぼっちなんだろうか。

だから部活をつくってワイワイやりたい。

それを叶えるために、騙してまで入部させようとしたのかな。

騙したのはよくない。

でも、楽しい高校生活を送ることを、この人はあきらめていないんだ。

私は入学して1ヶ月も経たない頃から、あきらめてしまったというのに……。

そこまで考えて、大きな大きなため息をつく。

「わかりましたよ。入部しますよ」

「えっ？　無理しなくてもいんだよ」

「だって、『ミルク部』つくりたいんですよね」

「そりゃあもちろん！」

先輩の目がきらりと輝いた。

なんだか子どもみたいに純粋な瞳だ。

思ったよりも悪い人じゃなさそう。

「じゃあ、入部しますよ。どうせ帰宅部ですし、家に帰ってもダラダラ過ごすだけですし」

「本当か？　うれしいけど、なんだか夢みたいだな」

先輩がそう言って笑って、それから「ああ」と思い出したように長机を見る。

「じゃあ、今日はお祝いだ！　なんせ初めての部員だからな」

「2人だけだと部として認められないんじゃないですか？」

「これから増やしていけばいいんだよ」

先輩は言いながら、壁に立てかけてあったパイプ椅子を持ちだす。

その時、先輩のズボンのポケットから何かが落ちた。

「何か落ちましたよ」

私がそう言って拾い上げたものは、目薬。

まさか。

私は無言で先輩を見る。

先輩は困ったような顔をしてから、笑いだす。

「いやー。まさかあんな古典的な演技に引っ掛ってくれるとは思わなかったよ」

「……は？　まさか涙だと思わせたのは……」

「あ、怒らない、怒らない。ほら、お菓子食べる？」

「なに言ってるんですか？　食べませんよ！」

「食べないなら明日、友だちとかクラスの奴らにあげちゃうよ」

「しかもぼっちじゃねーのかよ！」

私はそう叫んで、音楽準備室Ⅱを飛び出した。

通学路の桜並木がすっかり葉桜に変わった。

愛知の桜の開花は大体、４月の上旬頃。

栃木の桜の開花は大体、４月の中旬頃。

同じ日本だというのに、桜の咲く時期も違う。

だから私は桜を見るたびに、愛知のことを思い出してしまうのだ。

そして、緑の葉っぱに変わった桜の木を見て、寂しくなる。

それに、こうやって感傷に浸りつつ、通学路を歩けば、昨日の放課後のあれこれも忘れられる気がしていた。

だけど、どうしてもちょくちょく思い出してしまう。

あの高原先輩という面倒な人。

もう、二度と関わらない。

でも、あの入部届はどうしたらいいんだろう。

偽装されたのだから無効になるのかもしれないけれど。

だから入部届のことは忘れて、放課後はすぐに帰ってしまえばいい。

自分の中で昨日の出来事はなかったことにすればいいんだ。

そう思ったものの、名前を貸すのも嫌になった。

あの嘘泣きの演技と、ぼっちじゃなかったというオチでほとほと嫌になったのだ。

しかも、幽霊部員になったしても、あの部活に在籍しているというのが腑に落ちない。

そんなわけで、今日は学校に着いたらすぐに、職員室へ行こうと決意した。

どんなかたちであれ、八汐先生と話せるのはうれしい。

今日は張り切って、新しいヘアピンをつけてきてちょっと気分もいいし。

ゴールドのヘアピンにちょこんとついた桜色のキラキラしたストーンの飾り。

桜が散ってしまったからこそ、少しでも鮮やかなものをつけたい。

好きな人の前ではなおさら。

私は鼻歌混じりに歩みを速める。

教室に入った途端、私は桜を見た。

いや、桜の妖精と言ったほうが正しいだろうか。

ってゆーか、彼女は間違いなく人間なのだから、妖精は正しくないのだけど。

教室の中央の一番前の席。

私もクラスメイトもみんなそちらに釘づけだった。

１０日間、学校を休んでいた一黒羽苺《くろばねいちご》さんが登校してきたから。

いやいや、それだけじゃない。

彼女がきれいすぎるからだ。

黒羽さんは美しい、というより美少女という言葉がぴったりだった。

真っ白な透き通るような肌はつくりものみたいで、大きな瞳に高い鼻、小さく形の良い唇。

それらのパーツが、小さな顔に最高のバランスで配置されている。

ふわふわのゆるいウェーブのかかった髪の毛は天然の栗色でお尻に届きそうなほど長い。

長くすらりとした手足に華奢な体つき。

あまりにも現実離れした彼女は、制服を着た人形にも見える。

初めて見たわけではないのに、久々に登校してきた黒羽さんは、かわいさがよりパワーアップしていたのだ。

あちこちから聞こえる、「やっぱりかわいいよねー……」とか「やべえ、うちのクラス最高」というどよめき。

だけど、あこがれの眼差しで見つめる者だけではない。

「えー、やだぁ。黒羽さんってば登校してきたったんだー？」

悪意たっぷりにそう言ったのは、明井率いる『他人の悪口が生き甲斐軍団』だ。

「よくもまあ、登校できたもんだよねえ。人の彼氏奪っておいてー」

明井は自分の席に座っている黒羽さんに聞こえるようにそう言った。

「歩乃、かわいそー」と明井の仲間が言うものの、見栄すいた嘘をつくんじゃないと思った。

『見栄すいた嘘をつくなよ、このバカチンが』と言ってやりたいけども。

そんなことをすれば、せっかく黒羽さんが登校してきてくれたことに水を差すことになりかねない。

私は唇を噛んで黙って教室を出た。

あれは、まだ桜が咲き始めたばかりの、今から2週間くらい前のこと。

私は偶然、見てしまったのだ。

忘れ物を取りにこようと教室のドアを開けようとしたら、中から声が聞こえてきた。

「好きです」という男子の声。

あらー。告白の場面に割って入るわけにはいかないよね。

そう思ってその場を立ち去ろうとも思ったけれど。

誰が告白をされているのか気になって、好奇心で見てしまった。

相手は黒羽さんだったのだ。

いやー度胸あるなあ。相手の男子はイケメンだけど、黒羽さんの美少女っぷりと釣り合うかと言われれば首をひねってしまう。

それだけ、黒羽さんはかわいいとかきれいとか、ただの美少女というよりは、浮世離れしているレベルのものっすごくきれいな女子だった。

そんな浮世離れした美少女がどんな返事をするのか。

興味があったので、ついついそのまま聞き耳を立ててしまう。

悪いのはこんなところで告白をした男子が悪いのだ。うん。

黒羽さんは、はー、とため息を1つ。

それから年齢よりもずっと幼い声でこう言った。

「無理」

「えっ」

「だから無理」

「あ、もしかして、いつも遊んでる女子のこと気にしてる？　あいつらならただの友だちで――」

「そうじゃなくて興味ない。ってゆーか、そもそもあんた誰？」

黒羽さんはかわいい声で、容赦ない言葉を叩きつけ、男子の胸にぐさぐさと刺していく。

結局、男子は泣きそうになりながら教室を出て行ったのだ。

実は、この男子、明井歩乃と仲が良いらしい。

なんでも中学からの仲だとか(他の女子が言っていた)

で、明井はこの男子と付き合っているつもりだったそうだ。

それで、たぶん、この男子が LINE かなにかで黒羽さんに告白し、玉砕したことを明井に愚痴ったのだろう。

明井は黒羽さんのことを、『私の彼氏を奪った悪女め！』と脳内変換したんだと思う、たぶん。

そうやって次の日、明井率いる悪口が生き甲斐グループから、黒羽さんへの悪口攻撃が始まったのだ。

明井もなかなか小者なので、本人の前で堂々と言わない。

聞こえるように仲間たちと悪口を言う。

それが関の山なのだ。

そんな弱くて愚かな人間の悪口を、黒羽さんはただ黙って聞いていた。

聞いていたかどうかはわからないけれど、反論する様子はなかった。

黒羽さんはその美少女で眩し過ぎるゆえなのか、話しかける猛者がいない。

例の告って玉砕した男子が、ここでかばえばカッコ良かったんだけどね。

奴も見て見ぬふりしてたみたいだから、その男子も明井と同類なのだろう。

そんな理由があって、黒羽さんもぼっちで、私は栃木に馴染めず早くも青春あきらめモードでぼっちで。

じゃあ、どっちのぼっちが希望があるかと言えば、黒羽さんだろう。

だから私は黒羽さんを庇おうと思った。

今思えば、正義感丸出しの、ただの自己満足なわけだけど。

でも、ただ悪口を言われ続けている人を見て見ぬふりするような人間にはなりたくなかった。

『多勢に無勢だなんて、やり方が汚い！』

私は明井に向かって、ハッキリとそう言ったのだ。

そこから私が奴らの次のターゲットになったことは、言うまでもないだろう。

どうせ、ここで黙っていても、こいつらの次のターゲットは私だったのかもしれない。

だからせめて潔く散ろう。

自分が正しいと思うことを貫こうと思ったのだ。

それから2日後、黒羽さんは学校を休んだ。

1日、2日、3日が経過しても、まあ風邪だろうと思っていた。

だけど、さすがに5日経過、さらに1週間が経過すると私は悩むようになってきた。

風邪にしては、随分と長く休んでいる気がする。

人には色々な体質があるから一度風邪をひくと治りにくい人もいるのだろう。

でも、それにしてもタイミングがぴったりだ。

明井の悪口を、私が止めた2日後から休むだなんて。

いやいや、偶然だよね、と思うものの。

それでも空の席を見ていると、不安がどんどん増した。

私がしたことは本当に正しかったんだろうか。

たとえば、先に黒羽さんに相談するとか、実は波風を立てられたくなかったとか。

もしかしたら、黒羽さんと一緒にお弁当を食べ、休み時間のたびに話しかけて私だけは仲間です、というアピールでも良かったのかもしれない。

感情と勢いだけで動くんじゃなかった。

そんな後悔をしていたら、学校を１０日休んだ黒羽さんが登校してきたのだ。

目的もなく廊下を歩いていた私はふと足を止める。

なぜ、私は逃げてきてしまったのだろう。

黒羽さんを勝手にとは言え、かばったのだから、責任を持つべきだ。

今も味方だということを、彼女に示さないとそれは明井たちや、それを見ているだけの人間と同じになってしまう。

私が急いで教室に戻ると、かわいい声が聞こえてきた。

「あんた誰？　クラスにいたっけ？」

黒羽さんが明井に向かってそう言っている。

「は、はあ？　こいつ、何言ってるんだかさっぱりわからないね」

なぜか明井は自分のグループの女子に同意を求めていた。

おいおい、ちゃんと黒羽さんと話せよ。

「なんだかギャーギャー騒いでいたようだけど、うるさいのよ」

黒羽さんは戸惑うだけの明井に追い打ちをかける。

「ラジオ聞いてたんだから、邪魔しないで」

それだけ言うと、スポッと耳にイヤフォンを入れて直して黙りこんだ。

「え～～なにあれ～～感じ悪～～い」という明井に、いやいや散々、悪口を言った相手に感じの良さを求めるなよ、とツッコミたくなる。

ともかく、黒羽さんは、実は明井の悪口は聞こえていなかったのかもしれない。

少なくとも、なんか言ってるな、くらいにしか思っていなかったのかも。

私は華奢な背中を眺めつつ思う。

あのくらい、私もタフになれたらいいなあ。

私がようやく八汐先生との会話の時間をゲットできたのは、放課後のことだった。

１０分の休み時間じゃ足りないから、お昼休みに職員室に行ったら先約がいたのだ。

その先約とは、黒羽さんだった。

何やら真剣に何かを話していた彼女と先生を見て、さっさと退散。

だけど退散する前に、ブレザーのポケットに忍ばせたスマホをすっと取り出す。

今日の八汐先生はいつものジャージ姿ではなく、濃いグレーのスーツ姿。

体育の授業がない日専用のレアで、ついでに言えば私はスーツ萌え。

そんなわけで、今日の八汐先生を遠くから激写。

盗撮ともいうけれど。

私がスマホの画面を確認して、満足して教室へと戻った。

結局、黒羽さんが職員室を出たのは、お昼休みが終わる直前だった。

しょうがない、先生との楽しいお喋りの時間は放課後のお楽しみ、ってことにするか。

そう思って、放課後に職員室に行くなり、八汐先生が「ああ、知立。呼びに行こうと思ってたんだ」と顔を上げた。

えっ？　先生が呼びに行こうと思っていたってことは……。

告白ですか？

それともプロポーズ？

全部、OKですよ。

いつものように、言葉に出さなかったのは、スルーされるのが堪えるからだ。

さすがに冗談で言っているわけだけど、半ば……いや９９％くらい本気なので、先生は立場上なにも言えないとしても無反応は寂しい。

私、先生のことどんだけ好きなんだよ。

どんどん好きになってるな。

これも青春なのでは？

そんなことを考えてニコニコしていたのも束の間。

「知立、本当に『ミルク部』には入部したのか？」

うう、今一番、思い出したくない出来事だ。

いくら先生のイケボから飛び出した言葉だとしても、それとこれとは別。

私が否定しようとした時、先生はこう続ける。

「黒羽が、ミルク部を見学しに行ったぞ」

「えっ？　黒羽さんが？　なんでですか？」

「理由は知らん。牛乳が好きなんだろ」

「牛乳が好きでも、ミルク部がこの学校にあるってことを知ってたって変ですよね」

「わからん。今日、見学に行ったことが事実だ」

「そうなんですか。ってゆーか、部員が１人なのに部として成り立っているんですか？」

「まあ、そこが問題なんだが、ちょっと事情があるから今はいい」

「部長の高原先輩は変な人ですし、部として認めちゃ……」

私はそこでハッとする。

「失礼します」とお辞儀をして、慌てて職員室を出た。

それから音楽準備室Ⅱへ向かう。

そうだよ、『あの先輩』しかいないからこそ、黒羽さんと二人きりなんてさせるわけにはいかない！

音楽準備室Ⅱへ行き、ドアに手をかけたその瞬間。

「キャアアアアアア」

女の子の悲鳴が聞こえて、私は急いでドアを開け、「黒羽さん！」と彼女に駆け寄ろうとする。

そして、目の前の光景を見て動きを止めた。

黒羽さんはパイプ椅子にちょこんと腰かけて、何事かという顔でこちらを見ている。

そしてホワイトボードの横に立っている高原先輩こと変態。

「おお。知立さん。来てくれたんだね」

「へえ、知立さんも部員なの？」

「そう。我がミルク部の第２号だよ」

「ちがいますから。入部してませんから」

私はキッパリと否定して黒羽さんに視線を向けた。

「大丈夫？」

「え？　なにが？」

「さっき悲鳴が聞こえたから……」

「ああ、それは」

黒羽さんはそう言いかけて俯いた。

私は変態をきっと睨みつける。

しかし、変態は涼しい顔で動揺することもなく、こう言った。

「牛乳にまつわる怖い話を聞かせてあげたんだ」

「牛乳にまつわる怖い話？」

「そう！　牛乳が飲める体質なのにただの好き嫌いで、まったく飲まなかった人の末路だ」

変態は得意気に言うと、「知立さんも聞くかい？」と聞いてくる。

「いえ、聞きません」

すると、すぐ隣で黒羽さんがほーっと胸をなでおろしていた。

どんだけ怖がらせたんだ、この変態は。

「まあ、牛乳を飲んでいれば、人生はバラ色になる。それは間違いない」

「怪しい宗教かなにかですか……」

「僕が実際、牛乳を飲んで背が伸びたし、ダイエットも成功したからね」

「ダイエットに関しては、どっちかというと先輩が努力したからなのでは……」

「いや、牛乳のおかげ」

先輩はそう言いきってこう付け加える。

「生乳１００％の牛乳に限るけどね」

「それは余計に脂肪が多いのでは……」

「いいのよ！」

黒羽さんがそう言って、ぴっと姿勢を正す。

同性の私でもうっとりと見とれてしまう横顔。

彼女は続ける。

「生乳１００％がいいわ。脂肪分は摂取するべきよ」

そう言ってちらりと黒羽さんは下に視線を向ける。

彼女の視線の先は、自分の胸だった。

ああ、なるほど、そういうこと……。

なんとなく寂しい気持ちになってしまい、黙りこんだところで変態がこう言う。

「ところで、黒羽さんは入部してくれるのかな？」

「もちろんです」

即答する黒羽さんに、変態は大きく頷いて、それから「ちょっと待ってて」と部屋を出て行った。

一気に静かになった部屋で、黒羽さんに聞いてみる。

「あの……。本当にこのミルク部に入部するの？」

「なに？　悪い？」

「そういうわけじゃないけど」

「病み上がりだけど、別に熱に浮かされているとかそういうことじゃないの」

「えっ？　病み上がり？」

私がそう聞き返すと、黒羽さんは目をぱちくりさせてから答える。

「そう。風邪だと思っていたら肺炎だったの。だから長く学校を休んでいたのよ……って、知立さんも私と同じクラスだから知ってるでしょ？」

「あ、うん。そうだったね」

私は頷いたものの、額に指を当てて考え込む。

えーっと、黒羽さんが明井に悪口を言われっぱなしだったから、私が止めに入った。

その２日後から彼女は学校を休み、１０日後の今日、復帰。

理由は悪口を言われているのが嫌というわけではなく、肺炎と。

もしかして、もしかすると。

そもそも黒羽さんは悪口なんぞ気にしていなかった？

結構、物事ハッキリ言うタイプみたいだし、その気になれば明井に向かってずばっと言えちゃうのか。

まだ彼女を短い時間しか見てないけど、そういう人だよね。

じゃあ、私が庇ったことはあまり意味がなかったのか？

ただ、私が変な正義感で庇う→なんとなく黒羽さんが『クラスメイトまで巻き込んじゃった……私のせいで』とか責任を感じて学校に来にくくなる。

そういう状態にはなっていなかったってことか。

それならまあ、いいかな。

「私ね、この部活に入部した理由がね」

突然、黒羽さんが口を開く。

めいっぱい声のトーンを落として、それからドアのほうを見て誰もいないこと確認してから続ける。

「高原先輩のことが好きだから、なの」

「えっ？」

急な恋バナに私は思わず驚いてしまう。

私も黒羽さんも高校１年生なんだし、恋の１つや２つ、あるのはわかる。

私だって八汐先生を好きなわけだし。

でも、なぜにあの変態。

「絶対に秘密よ。本人は言わないでね」

「うん。さすがに言わないし言えないよ」

「もし言ったら、回し蹴りとかかと落としするから」

黒羽さんはそう言ってふふんと笑ってから、「もちろん靴の先端には画びょうを仕込んでおくわよ」と目をきらりと輝かせた。

もちろんって、回し蹴りとかかかと落としをするにあたって、靴の先に仕込み入れるのは当然なのかよ。

なぜかうれしそうで、鼻歌まじりに窓の外を見ている黒羽さん。

私はその後ろ姿を見ながら思う。

変態を好きになるのは、もしかしたら類友だから、なのかなあ。

変態が戻ってきた時、その手には紙パックの牛乳が3つあった。

1つを黒羽さんに、もう1つを私に渡し、それから自分の分の牛乳を頭上高く掲げる。

「さて、それじゃあ部員が3名になったミルク部のお祝いを記念して――」

「ちょ、ちょっと、私、まだ入部するって言ってないですし、入部する気はないですよ」

「前向きに検討してくれると思っているよ」

変態はそう言うと、「ああ、そうだ」と続ける。

「先ほど、交渉の結果、顧問が決まりました。メインが男子バレー部の顧問なので、ミルク部にはたまに覗きに来てくれるだけになるそうです」

その言葉に、私は「男子バレー部……」と呟く。

「ミルク部の顧問は、八汐先生に決定しました！」

「入部します」

私は無意識のうちにそう答えていた。

黒羽さんが驚いたようにこちらを見ている。

変態はなぜか、うんうんと頷いてから仕切り直す。

「それじゃあ、新しい部員２人に、かんぱーい」

「かんぱーい」

紙パック同志をこつんとぶつけ合い、お酒の席の乾杯の真似事をする。

一口飲んだ牛乳は妙にぬるくて、それもまあ、変態……高原部長が八汐先生を説得するのに時間がかかったならしょーがない。

そう思っていたら、部長はニコニコしながら言う。

「あ、そうそう。牛乳はぬるいほうが美味しいから、これを買ってから校舎をぐるりと３周ほどしてきたよ」

……前言撤回。

やっぱ、この人、変態だわ。

ちらりと黒羽さんに視線を向けると、眉間に皺を寄せながら牛乳を黙って飲んでいた。

好きな人のぬくもりだわ、なんて表情をしてなくてホッとする。

でも、これが八汐先生のぬくもりだったら。

ありがたく頂戴して一口一口味わって飲むだろうから、私もまあまあ変態だな。

その日、帰り道を歩く私の足は羽のように軽かった。

ミルク部に入部したことは後悔していない。

顧問が八汐先生というだけで、入る価値はある。

先生がバレー部、しかも男子の顧問だと知って、どうにか入部できないものか。

男装？　それとも女子バレー部に入ってこっそり眺める？

いやいや、私はそもそも運動音痴で球技が一番苦手。

じゃあ、男子バレー部のマネージャーをするという手もある。

でもマネージャーなんて私に務まるのだろうか。

だけど、放課後も先生と接点を持つならばマネージャーしかないよなあ。

でも、なんか、マネージャーとか面倒くさそう……。

そう思って、やっぱり私は帰宅部としてヒトカラを楽しんで自分で好きなような生活を送りたい。

放課後に先生と会える日々はあきらめて、休み時間にできる限り話しかけるんだ。

そう決心した途端に、ミルク部というなんともゆるい名前の、たぶんなんともゆるい活動の部活の顧問だって。

男子バレー部と掛け持ちだから、ミルク部に来る頻度は落ちると変態もとい部長が言ってた。

でも、先生と朝のホームルームと体育の授業、帰りのホームルームで会えるだけではなく、部活でも会える。

それだけでも十分、私にとっては幸せなことなのだ。

春の温かい風に、髪の毛を抑え、私は空気を肺いっぱいに吸いこむ。

見渡す限りの田園風景が、今日は色鮮やかな花の咲き乱れる花畑に、少し離れた場所にぽつんと見える民家は絵本の中に出てきそうなかわいらしい家。

すぐそばを通る軽トラは森の小道を駆ける白馬。

そんなふうに、いつもの見慣れた田舎道も、全然違ったメルヘンに見えてくる。

自分でもなんという脳内お花畑状態だと思う。

でも、一方で、そりゃあしょうがないじゃないか、と思う自分もいる。

だって春香は頭が残念な子なんだから……。

って、そうじゃない。

自己ツッコミも決めてしまうほどに、浮かれている。

私がここまで浮かれるのは、本当にちゃんとした理由があるのだ。

クラスメイトも、そして別のクラスの女子も『ただのおっさん』と笑う八汐先生に恋をした理由。

中庭でいちゃついてんじゃねえよ！

私が心の中でそう叫んだのは、天気の良い昼休み。

今から１０日前のことだった。

渡り廊下の手前にある自動販売機の脇のベンチに腰かけて、お昼を取るのが定番になっていたのだが。

その日はそこで男子グループがずっと喋っていたので、避難してきた。

どこでお昼を食べようか。

その時の私の選択肢には教室に戻る、だけはなかった。

黒羽さんが学校を休み始めて、明井たちの悪口のターゲットは本格的に私になったからだ。

もともと悪口を止めに入ってから、昼休みは教室以外の場所で過ごしていたのだけど。

それでもやっぱり、聞こえるように悪口を言われながら食べるお昼ご飯は美味しく感じない。

だから教室から避難してきたのに。

途方に暮れていた時に思い出した。

この学校の中庭に、ベンチがあったことを。

今日は天気も良いし、温かい気候の中ならむしろ外でお昼を食べるべきだろう。

そんなふうに思いつつ、心もずっと軽やかになって中庭へ。

するとそこには、カップルが『これでも食らえ！　リア充光線！』ってくらいに激しくベンチでイチャイチャしていた。

具体的に言うと、男子の膝の上に女子が乗って、お弁当を女子が「はい、あーん」と言いながら食べさせていたのだ。

なんかもっとこう、隣同士に座って……しかも2人の間には結構スペース空いてて、もじもじしながらも二人でお弁当を食べている。

そんな微笑ましいカップルだったら、私もそっと退散できたのに。

さすがに膝乗りカップルはいただけないわ。

そう思いつつ、とぼとぼと歩いていると、声をかけられた。

声の主は八汐先生だった。

いつも怖い顔してるし、口調も穏やかとはいいがたい。

そんな先生に、一体何を言われるのかとビクビクしていると。

『昼飯、まだなのか？』

ビックリするくらいに優しい声と、穏やかな表情でそう聞いてきたのだ。

私が頷くと、先生はちょっとだけ考えて、『穴場のスポットがある』と言ってくれた。

先生の後に着いていくと、『相談室』という狭い教室に連れて行かれたのだ。

なんだか嫌な予感しかしなくて、逃げ出そうと思ったけれど、どうせ行く場所なんかない。

私と先生は、そこで本当にお昼ご飯を食べ始めたのだ。

私は菓子パンとイチゴミルク、先生はカップ焼きそばとおにぎりとペットボトルのお茶。

『知立、そんなに少しで足りるのか』

『大丈夫です』

そんなふうに言葉を交わした後、先生はものすごく穏やかな声でこう聞いてきた。

『なにかあったのか？』

その言葉に、私は思わず今までの、明井たちのことを先生に打ち明けてしまったのだ。

誰かに聞いてほしかった。

両親には心配をかけたくないから話せない。

それでも誰かに話したい、弱音を吐きたい。

だけど、こっちでは相談できる友だちがいない。

だから私は今までのことを話した。

先生は黙って聞いていたものの、優しい笑顔でこう言ってくれたのだ。

『がんばったな』

その言葉で、どれだけ救われたことか。

先生は、『明井たちが知立に悪口を言っている現場を、先生が偶然目撃した体でこってりしぼってやろうか？　知立はどう思う？』と聞いてきた。

私は、『大丈夫です。どうせ聞かないですよ』と先生登場は断ったのだ。

先生は大きく頷いて、去り際に一言。

『いつでも話は聞くからな』

そう言った先生はなんだかやけに眩しかった。

１５歳の娘が恋に落ちるには、十分すぎたのだ。

春の香りに浮かれ、そして唯一の味方を得た私は、次の日からお昼休みを教室で取るようになった。

またお昼休みにウロウロしているところを、先生に見つかって心配をかけたくない。

そして、私は辛ければ先生に相談できる、という最強のカードを手に入れたのだ。

無敵の気分で、私は昼休みにぼっちだろうが、悪口を言われようが鼻で笑っていられた。

春の訪れは、人を大きくさせるんだなあ。

すると、どこからか肥やしの匂いが……。

思い出の旅から戻り、ふと眼前を見ると牛舎があった。

ああ、こんな場所まで歩いてきていたのか。

私は極力、息をしないようにして早足で歩く。

すてきな恋のエピソードを牛糞の匂いにより台無しにされた。

まあ、その恋ってのも、まだ惚れてから１０日目っていう恋愛の初期段階の症状なわけだけども。

それでも私は、先生が好きで好きでたまらない。

明日からは放課後は私がなんとか頭をひねって用事をつくるのではなく、先生のほうから来てくれる。

これって、控えめに言って天国じゃないの。

真っ白なホワイトボードに、やけにきれいな文字でこう書かれている。

＜ミルク部としてやるべきこと＞

・一日、最低でも２リットルは牛乳を飲む。
・できれば生乳１００％
・家の冷蔵庫には常に牛乳のストック(１リットルのパック)が３つはあること。
・食事の時は、牛乳を飲む。
・お茶の時間は牛乳。
・水分は全部、牛乳で摂取。

「以上。これが、我がミルク部の活動の１つ」

変態……もとい部長は、やけに良い笑顔で続ける。

「毎日牛乳漬け生活！」

「……んな無茶な」

私はため息をつき、ちらりとドアのほうに視線を向けた。

まだ、来ない。

来る気配がない。

ミルク部の部員になって今日で２日目。

顧問である八汐先生は、ここにはいなかった。

でも、『ちゃんとやってるかー？』なんて言いながら覗きにくることを期待している。

「活動の１つ、ってことは、まだ活動があるんですか？」

黒羽さんは呆れたような顔をまったく隠さずに、ため息まじりに聞いた。

「あるよ！　そのもう１つが大事なんだ」

部長は、ホワイトボードの空いているスペースに、赤のマーカーでこう書き始める。

　牛乳の美味しさを、全校生徒に気づかせる！！！！！！！！

……なんでもいいけど、ビックリマーク多いな。

私が呆れて、もう何も聞くまい、それよりも廊下を歩いてくる足音にだけ集中しようとしていると。

部長が鼻息荒くこう宣言する。

「本当は、全国の小中高生がターゲットなんだが、それはまた後でいい！　先にこの高校の生徒だ！」

部長はマーカーの先でホワイトボードをコツコツと叩きながら続ける。

「まあ、みんなも知っているように、栃木は牛乳の生産量が本州で１位だ」

知らねえよ。

「それくらいは常識よね」と黒羽さん。

まじかよ。

「そうだな。だがしかーし！　それにも関わらず、『牛乳きらい』とか『飲んでも太るから』とか抜かす奴らの多いことっ！」

ばん、と部長はホワイトボードを叩く。

狭い部屋に響き渡る軽い金属音。

部長はハッとしてから、こほんと咳払いをする。

「とにかく、牛乳は美味しいし、栄養もたっぷりある。なによりも美味しい」

美味しいを２回繰り返してる。

「つまり、牛乳嫌い＝栃木を嫌いということに等しい、というわけだ」

なにこの暴論。

「でも、牛乳を飲むとお腹がゴロゴロしちゃうとか、あと乳製品のアレルギーの人もいるわけだし」

黒羽さんはそう言ってから「うちのパパもお腹ゴロゴロするタイプだから」と付け加えた。

「それはそれ。そういう人はしかたがない。体質だからね。でも、飲める人が飲まないのはもったいない！」

部長は、はあと細く長い息を吐く。

それから長机の上に置いたカバンから何かを取り出す。

２５０ｍｌパックの牛乳。

部長はそれをほとんど一気に飲み干して、こう宣言。

「とにかく何が何でも牛乳好きを増やしていくのが、我がミルク部の使命だ」

それから私はミルク部の活動に毎日、参加した。

ほとんどが部長の牛乳大好き話か、ぬるいパック牛乳でミルク話をするという非常にゆるい活動だ。

最初はゆるいから私に合っているかも、と思ったけど間違いだった。

とにかく退屈で退屈でしかたがない。

これじゃあ放課後を無駄にしているのようなものだ。

おまけに、『顧問である八汐先生に会える』というメインイベントがちっとも発生しない。

しびれを切らして部長に聞いてみたら、『ああ、なんでもバレー部の大会が近いらしくて来月くらいまで来られないそうだ』と。

そんなわけで、私は来月まで幽霊部員になることに決めた。

部長は変態だけども、黒羽さんに変なことをするほど人間やめているわけでもないとわかったし。

むしろ、頭の中は牛乳のことでいっぱいなんだろう。

そういう意味では安心。

それに、黒羽さんだって好きな人と2人きりのほうが幸せだろうし。

だから私は、来月まで幽霊部員を決め込むことにした。

「ちょっといい？」

あるお昼休み。

私がお弁当を取り出すと、目の前に立っていたのは黒羽さんだった。

「え？　あ、うん。なに？」

「ここじゃなんだから、来て」

そう言って黒羽さんに廊下の隅に連れて行かれる。

一体、何の用事があるのだろう。

まったく想像がつかない。

彼女の華奢な背中を眺めつつ。首を傾げた。

私と黒羽さんは同じクラスで同じ部活だ。

だけど、どうも彼女は近寄りがたくて、気さくに話しかけることができない。

もちろん、苦手とか嫌っているというわけでは断じてない。

これぱっかりは私のコミュ力の問題と、それから黒羽さんが美少女すぎるゆえ、こんな平凡を絵に描いたような外見の私が話しかけても良いものか悩んでしまうのだ。

私と黒羽さんはお互いに休み時間はぼっちだけど、彼女がそもそも好きでぼっちでいるのか、それとも本当は話しかけてほしいのかもわからない。

話しかけてもいいのだとしても、私はどう思われているのかいまいちつかめないでいる。
ただ、恋バナをされたということは仲良くしたいという意思表示でいいのだろうか。
そんなことをあれこれと考えていると、何やらチラシを見せられた。
「……ってことで、来週の土曜日、って聞いてた？」
黒羽さんの言葉に、私は遠慮がちに「すみません」と首を左右に振る。
「まったく……。高校生にもなってちゃんと人の話も聞けないの？」
「すみません」
「謝ればいいってもんじゃないのよ」
黒羽さんはゴゴゴゴ、と背景に擬音がつきそうな勢いで私を睨みつけ、それから続ける。
「まあ、いいわ。もう一度だけ言うからね」
「はい、お願いします」
「部長の提案で、ミルク部は野外活動をすることにしたわ」
「野外活動？」
「そう。今週の土曜日、つまり明日ね。明日、農業祭りってのがあるの」
「へえ」
「そのお祭りは、ミルク部は全員強制参加よ」
「えっ？　強制？　だって明日だよね？」
「これ３日前に決まったのよ。知立さん、３日間、部活に来なかったじゃない」

「ああ、それは……。でも3日前でも急すぎない？」
「私も興味があるから行くわ。パパとのデート……父との先約があったけど、部活優先よ」
黒羽さんはなぜか得意気な顔をする。
お父さんちょっとかわいそう。
そしてパパとデートってなんかかわいいな。
デートと言えば。
「……ねえ。明日さ、私、行かないほういいんじゃない？」
「なんで？」
「だって、そのほうが部長とその、２人きりというか、」
「ああ。もし知立さんが来なくても、先生が来るらしいのよ。だから3人は参加決定」
「えっ！　じゃあ、行きます！」
私が即答すると、黒羽さんはにっこりと笑った。
わーい、先生も来るだなんて、最高のサプライズ！
なんかダブルデートみたいでドキドキしちゃう。

２．農業祭りと野望

そんなわけで、放課後は即家に帰った。
黒羽さんいわく『今日は部活は休みよ。明日に備えてこいって部長が言ってたわ』と。

案外、気が利くじゃないのよ、変態部長！

私は家に帰ると、着替えもせずに自室にこもった。

クローゼットを開け、どういう服が良いのかを考える。

やっぱりワンピースだろうか。

それとも、ジーンズか？

案外、ロングスカート？

私はそう考えて、ふと気づく。

先生の好みの服って、まったく知らないや。

それどころか、趣味とか休日に何をしているのかとか、好きな色さえ知らない。

急に先生が遠い遠い存在のような気がしてくる。

そこでハッと我に返った。

ダメダメ、後ろ向きになったら明日が楽しめない。

明日、先生とたくさん話していっぱい知るんだ。

先生と生徒の恋の始まりは、明日かも。

なーんてね。

私は「やだーもー、禁断の恋！」と一人で騒ぎながら、服をあれこれと選んだ。

結局、服は長めのカーディガンにＴシャツ、ジーンズに決定。

場所が牧場だからＴＰＯも考えなきゃね。

そして、その日の夜はお風呂に３時間浸かり、肌や体を念入りに手入れをした。

こうして明日にバッチリ備えて、夜１１時。

いつもよりも１時間以上も早くベッドへ入る。

ああ、明日が楽しみで眠れないよー！

そんなふうに思っていたものの、案外すんなり夢の中へ。

次の日は快晴だった。

雲１つない青い空。

愛知の空よりも、こっちのほうが空の色が濃い青だ。

それだけ、のどかな田舎だってことだよなあ。

ああ、このまま山のほうまで飛んでいってしまいたい。

そしてそのまま山にこもっていたいよ。

私がそんなことを考えるのは、ショックが大きいからだ。

ため息をつき、ちらりと前に視線を向けた。

農業祭りが行われる牧場に現地集合。

それはいい。

自転車で行ける距離だったから。

ここに来るまでは、歌いながら立ち漕ぎで本当に気分が良かった。

デートの待ち合わせ場所に向かう人の気分、っていうのも味わえたし。

だけど、牧場に着くと、先に来ていた部長が声をかけた先生は……。

それは八汐先生ではなかった。

先生と呼ばれたのは、ぷっくりとした体型につるんとした頭。

まるでゆるキャラのような見た目をした、化学の田中先生だ。

……八汐先生じゃない。

もしかして、田中先生と八汐先生がくるのかな？

そう思ったけれど、黒羽さんが来ても、お祭りが始まっても、八汐先生が来る様子はない。

「あの、今日、八汐先生は」

そう聞いてみると部長がなぜか笑顔で答える。

「八汐先生は来ないよ」

「そう、ですか……」

私がガックリとうなだれると、田中先生は汗を拭きながら言う。

「じゃあ、私はあちこち回りたいのでこれで。若い皆さんは食に関するイベントがありますから、そちらを楽しんで」

「あ、はい。ありがとうございます」

部長が頭を下げ、「じゃあ、気をつけてね」と田中先生はニコニコしながら去っていく。

なんなんだ、なにしに来たんだ。

いや、まあいいんだけど。

田中先生なりに気をつかったのかもしれないし。

でも、八汐先生じゃないのかよー！

そもそも事の発端は、このお嬢様だよ。

私はちらりと隣に視線を向ける。

今日の黒羽さんは、シフォンのワンピースを身にまとっていた。

藍色の生地に白い花柄が散りばめられた、落ち着きと品のあるデザイン。

ワンピースの下に白いパンツを履き、小さなリボンのついた赤色のレザーの靴は歩きやすさ重視のヒールなしのぺったんこ。

長いウェーブの髪の毛はポニーテールにして、全体的に動きやすいスタイルであるものの、オシャレさは全開だった。

ついつい自分の服を見てしまう。

青いカーディガンに水色のTシャツ、白のジーンズにスニーカーと、色合いは黒羽さんとかなり似ている。

……色合いだけは。

なんだか黒羽さんの隣を歩くと、自分のセンスのなさと平凡すぎる外見が目立ってしまう気がした。

むしろ、八汐先生がここにいなくて良かったのかも。

そう思わないと、今日のショックはとてもじゃないけど乗り越えられそうもないや。

「あっ、豚肉おいしー。塩コショウちょうどいい」

「こっちは牛肉ね。牛肉は馴染みの味って感じがするわ」

「なに？　さては黒羽さんはブルジョアか？」

部長の言葉に、黒羽さんは割り箸を持ったまま「中流家庭ですけど」と答える。

私は牛肉を食べつつ、そのやりとりを見ていた。

豚肉と牛肉の食べ比べのイベントがあると聞いて、しかも無料だすげえなと部長に連れて来られたのだ。

白衣に白い帽子のどっちかというと普段は研究職をやっていそうな男性たちが黙々とお肉を焼いているのは、あまり見られる光景ではない。

豚肉と牛肉の乗ったお皿を受け取ると、簡易的なテーブルで立ち食いスタイル。

量はそれほど多くないものの、どちらも焼き方と塩加減が絶妙で美味しかった。

やっぱり私は牛肉が美味しいな。

俺も牛肉だなあ。

私は久々に食べた豚肉ね。

そんなふうに言い合いつつ、『豚肉』と『牛肉』と書かれているポリ袋に、割り箸を捨てる。

どちらかに割り箸を捨てて、投票するシステムらしい。

「いやあ。うまかった。やっぱ牛はいい。しかし豚もいい」

部長はご機嫌で歩き、屋台が出ている広場のほうへと向かう。

そして、部長はある1つのテントに近づいて行く。

そこには『牛乳飲み比べ』と書かれてあった。

食べ比べや飲み比べが多いなあ。

「飲み比べをしてもいいですか？」

部長が尋ねると、割烹着を着て三角巾をきっちりとしめた中年の女性がふんわりと笑う。

「はい、どうぞー」

女性は小さな紙コップに牛乳を注ぎ始めた。

牛乳のパックが真っ白なのは、わざと紙でも巻いているのだろう。

もしや、どのメーカーとか当てるの？

難易度高くないか？

そう思っていると、部長は腰に手を当て、一気に牛乳を飲み干す。

それから少しだけ考えてから、こう口にする。

「これは、正統派ながらコクの深い味。『那須野が原北牧場』の牛乳ですね」

「あら、当たり～」

女性はぱちぱちと拍手をする。

そして、紙コップに別の牛乳が注がれる。

さきほどのように部長は牛乳を一気に煽ると、うんうんと頷く。

「あっさりとした中にもまろやかさがある。これは、『那須の風だより』ですね」

女性が目を丸くして、それからパックを確認。

「正解！　すごいわね！」

「牛乳好きなので」

部長はそう言って爽やかに笑い、「ちょっと、ちょっと、この子すごいわよお」といつの間にか集まってきたテントにいた女性陣全員が見守る中で、飲み比べを続行。

「うーん。コクがあり甘さも強めなものの、後味はきりっとしている……これは、『栃木の青い山を見つめて』の２０１９年のリニューアル版ですね」

「せ、正解！」

「これは、随分と濃厚な味ながらも、さらっと飲めてしまう不思議な味わい、『那須の大地の雫』ですね」

「正解～。すごいわねえ」

「む……これは、あっさりと濃厚、両極端だけれどもどっちもストレートなうまみ、つまり……『日光の乙女』と『那須高原の緑のふるさと』のブレンドですね」

「えっ？　なんで混ぜたことわかったの？」

驚く女性陣たち。

私と黒羽さんは顔を見合わせる。

なにこの人、ガチの変態やん。

牛乳のメーカーをガッツリ全部当てられるとか、どんだけなのよ。

しかも、飲み比べの女性陣、ちょっと引いてるし。

ちなみに私と黒羽さんも牛乳の飲み比べをしてみたけど、大体、同じ味に思えた。

もちろん１つも当たることはなかった。

部長、これを当てるのは素直にすごいと思うけど、私もこうなりたいとは思えない……。

それから屋台で焼きそばを食べたり、牛串を食べたり、カフェオレを飲んだり、食べてばかりだった。

部長は焼きそばと牛串を食べたものの、頑として飲み物は牛乳オンリー。

飲み比べの屋台で牛乳をたっぷり買いこんで、「これで3日は持つな」とニヤリと笑っていた。

牛乳5パックが3日持たないって……。

しかも常にストックあるとか言ってたし。

やっぱこの人やばいな、悪い意味で。

でも、食べ物や飲み物がどれも美味しいから、部長の変態さもこの際、スルー。

屋台の隣にある広場には、牛がずらりと並んでいた。

柵で作られた円を牛と人がぐるりと回っている。

「あれはホルスタイン品評会だな」

部長は牛を見ながらそう言った。

牧場のお祭りだから、そんなものまであるのか。

順番を待っている牛たちは、くつろいでいる様子でとても大人しい。

それにしても広い牧場だなあ。

ああ、そういえば、私、小さい頃に家族旅行で栃木の那須に遊びに来たことあったな。

来たのはこの牧場ではないと思うけど、あそこも広かったなあ。

どこの牧場だったんだろう。

お父さんとお母さんに聞けばわかりそうだけど。

そんなことを考えていると、突然、部長が手を合わせ始めた。

今度はなにをしているんだろう。

拝んでいるように見える。

なんだか気色悪いから離れておこう。

同類だと思われたくない。

そう思って部長からすっと離れようとすると、声が聞こえてきた。

「牛様、いつも美味しい牛乳をありがとうございます」

感謝することは、いいことなんだけどね。

「どうか、どうか、牛乳嫌いの栃木県民が全員、牛乳好きになるよう洗脳できますように」

ものすごい野望、口にしてるよ。

私はちらりと黒羽さんを見ると、彼女の姿は忽然と消えていた。

どこへ行った？

さすがに部長が変態過ぎて、ショックで帰った？

そんなことを考えてキョロキョロしていると、見覚えのあるワンピース姿の少女。

「わー、牛ーおおきいー」

黒羽さんは興奮した様子で、牛に近づこうとしている。

「ちょ、黒羽さん危ないって」

そう言って連れ戻そうとした瞬間。

足がもつれて、転びそうになる。

でも、腕をしっかりとつかまれたので転ぶのは免れた。

顔を上げると、部長がそこにいる。

ふと、懐かしい感覚がした。

あれ？

この感覚、どこかで……。

そんなことを考えていたせいか、私は思いきり部長に体重をかけてしまう。

「わあ」という情けない声と共に、部長は地面に尻持ちをついた。

私はなんとか態勢を立て直して無事。

「ご、ごめんなさい……！　大丈夫ですか？」

さすがに申し訳なくなって謝罪すると、部長は勢いよく立ち上がる。

それから買った牛乳を確認して、ホッと大きな息を吐く。

「お前たち牛乳が無事で良かったー」

部長がうんうんと頷きながら、牛乳に話しかけている。

……頭でも打ったのかな。

ああ、いや、もともとこうだったね。

「俺は間違っていたんだ」

3階の音楽準備室Ⅱもとい『ミルク部』の部室で、変態もとい部長がわざとらしいため息をつく。

私と黒羽さんは顔を見合わせて、黙ったまま。

さすがに『あなたは最初から色々と間違っているよ』とは言えないし、言ったら面倒。

一昨日の農業祭りでその変態さは私も黒羽さんも、そして牛乳の見比べのテントのお姉さま方にも露呈された。

だからこそ、真の変態はそっとしておくべきだと思えたのだ。

もちろん牛乳が悪いわけではない。

部長の牛乳への執着がちょっとキモ……引くレベルだけなのだ。

ただ、本人も自覚したのか、『間違っていた』と口にしている。

もう少し、他の事にも目を向ける気にでもなかったのかもしれない。

たとえば、恋とか。

そう思って黒羽さんに視線を向けると、「なによ?」と彼女は驚いてこちらを睨みつけてくる。

今日もすてきに美少女全開だけど、相変わらず彼女は桜というよりは、バラっぽいな。

でも、ある意味、部長とはお似合いかもしれない。

部長にはすっぱりはっきり言ってくれる彼女のほうが、うまくいきそうだ。付き合った経験ないから知らないけども。

そんな他人の恋愛沙汰をあれこれと考えていると、部長は大きな声でこう言った。

「周囲を牛乳好きにするためには、楽しいという気持ちが大事なんだよ!」

「なんですか、急に」

私がそう言うと、部長は制服のポケットから何かを取り出す。

それは折りたたまれた紙。

「あ、これは俺のだった」と紙をポケットに戻し、カバンの中からクリアファイルを取り出した。

そこからチラシを2枚引き抜いて、私と黒羽さんに差し出す。

そのチラシには『千本松牧場　うんまいもの祭り』と書かれてある。

パッと見た雰囲気では、屋台やご当地アイドルがコンサートをするというお祭りらしい。

「この祭り、『栃木の名産品をつかった料理』が屋台出展の条件なんだ」

「去年、パパ……父と行きましたよ、ここ」

「そうか。俺も去年行ったんだけど、屋台だけじゃなく、移動販売車なんかもチラホラあって活気のあるお祭りだったな」

「そうですね。というか、え、まさか」

黒羽さんが顔を上げて部長を見る。

私もなんとなーく嫌な予感がして部長のほうを見た。

「そう、そのまさかだ。我が『ミルク部』も出展する。祭りは今月末だから、まだ時間あるしな」

「まさか牛乳で？」

「知立さん、俺という男をわかってないなあ」

わかってもないし、わかりたくもないよ。

「那須の牛乳をつかった料理でいこうと思ってる」

「牛乳と変わらないじゃないですか」

「いや、違う。牛乳そのものと牛乳をつかった料理は天と地の差がある」

「なんかそれ、牛乳をつかった料理をディスっているように聞こえますが」

「ディスってない。妥協はしてるけども」

部長は、はあとまたため息をついて続ける。

「本当は牛乳で勝負したいんだ。でも、別に俺の家は酪農家じゃないし、親族にも知人にも友人にも酪農家はいない」

部長は窓の外を眺めつつ、さらに続けた。

「だから、買ってきた牛乳しか飲めないわけだが、市販の牛乳を売るだけってのはさすがにダメだろう」

「まあ、そうですね」

「そうなると、牛乳をつかった料理になるんだよ。むしろそれしかない」

「料理って何を作るつもりなんですか？」

黒羽さんの言葉に、部長はきっぱりと言い切る。

「まだ決めてない！」

「じゃあ、出展は無理ですよ」

私がそう言うと、部長はにっこり笑ってこう言う。

「もう出展の申し込みはしてきた！」

「はあ？」

私と黒羽さんが同時に声を上げた。

「今日の午前中、ちょっと遅刻って体でね。申し込みは済んだし、出展できるから大丈夫」

「いや、全然、大丈夫じゃないですよ」

「牛乳への愛があれば乗り越えられる」

自信満々の部長は意味不明な発言をする。

もはや不安しかないよ。

このお祭り、いわゆるプロの人ばっかりが集まってるんだよね。

それなのに、アマチュアどころか高校生の料理が通用するんだろうか……。

次の日は『出展する料理はなにがいいか』ということをミルク部で話し合った。

「やっぱり牛乳をつかった料理といえばシチューですよね」

「普通過ぎる。そしてイメージは冬だな」

「夏ならやっぱりヴィシソワーズじゃないかしら」

「ヴィ？　は？」

「じゃがいもの冷製スープだろう。確かに牛乳はつかうが……」

「じゃあもうフレンチトーストでいいんじゃないですか？」

「それはなんかこう、花がないというか、お祭りでそれを買うか、という疑問がある」

「じゃあ、部長はなにがいいんですか？」

「タピオカミルク」

「今さら？　って感じもしますけど、思ったよりまともな意見ですね」

「本当ね。部長もまとな意見言えるのね」

そんなわけで、タピオカミルクに決まりかけたところで部長が口を開く。

「でも、タピオカミルクティーを売る屋台は他にも大勢あるだろうな」

「でしょうね」と私と黒羽さん。

「それじゃあ目立てない！　祭りに爪痕を残していかなければ意味がない！」

「楽しんでみんなに牛乳好きになってもらうことが目的じゃなかったんですか？」

「俺の目的は、世界中を牛乳好きに洗脳することだよ」

部長はそう言って頭を抱える。

やばいなー、本当にやばいなあ。

洗脳って本気で考えてるんだとしたら、もう警察に通報しておくべきかなあ。

私がすっとブレザーのポケットからスマホを取り出したところで、がらりと部室のドアが開く。

どきーん、と実に古典的に跳ねる私の心臓。

「お、やってるな」

後ろから聞こえる最強のイケボ。

振り返ればそこには、八汐先生が立っていた。

いつものジャージ姿もカッコイイ。

「ああ、八汐先生。ミルク部は『うんまいもの祭り』に出店する料理を決めているところです」

「へえ。出展するのか！　じゃあ、その日は先生も見に行くよ」

「本当ですか？」

私の言葉に八汐先生は無表情のままで答える。

「ああ、客としてだけどな」

それでもいい！

貴重な土曜日に先生に会えるなら、私それだけで幸せ！

今回は八汐先生本人が行くと言っているんだから、田中先生にチェンジということないだろうし。

「おっと。すまない。これから職員会議だった。あんまり遅くなるなよ」

「はーい」

先生は１つ頷いて、さっさと部室を後にした。

あーあ。もう帰っちゃった……。

でも、お祭りに先生が来てくれる。

私が作ったものを食べてくれる。

それだけで、がぜんやる気が出たぞー！

私は部長と黒羽さんを交互に見て、力強くこう言う。

「出店するからには、優勝を目指しましょうね！」

「……いや、優勝とかそういうのはないから」

部長の言葉など耳に届くはずもなく、私は熱心に出店用の料理を考え始めた。

普段、料理をしない私は、「牛乳をつかった料理」が、シチューくらいしか浮かばないのでスマホで検索。

「プリン、かあ」

そうぼやいた私に、部長が「む」と反応する。

ダメか、プリンも邪道ですか。

そう思ってスマホで新たに検索を始めようとすると。

「いいな、プリン！」

意外にも部長がプリンに乗っかってきた。

「うん。いいわね。お取り寄せのプリンに飽きたところだし」

黒羽さんのブルジョワスタイルはスルーするとして。

部長は、おごそかに口にした。

「それじゃあ、プリンで決まり！」

直後に私と黒羽さんはぱちぱちと拍手。

……ようやく決まったよ。

ミルク部がお祭りに出店するのは、プリン。

さあ、決まったからあとは作るだけだね。

でも問題はそこだった。

数日後に、部長が放課後に調理室を借りてくれた。

『家庭科部の部長にとある男子の写真を見せたら、喜んで開けてくれたよ』とさらっと言ってのけたのだ。

この部長、悪知恵にしか頭が働かないのだろうか。

まあ、でも、調理室を借りられたのは良いね。

材料はすべて部長が用意してくれたし、フットワークが軽くて部員任せにしないのは尊敬する。

そこだけはね。

「えーっと、まずはカラメルを作るそうです」

私がレシピを見ながら言うと、黒羽さんがきょとんをする。

「カラメルって別で添付されてるのをかけたり、あと、プリンの底にあるやつよね」

「要は砂糖を焦がせばいんだろう」

部長はそう言うと、鍋にグラニュー糖と水をぶちこんで、鍋にかけ始める。

「なんか、火が強くないですか？」

私の言葉に、部長は余裕の表情。

「だーいじょうぶだーいじょうぶ。強火のほうが料理してるって感じあるだろ」

「こげくさいけれど、大丈夫なの？」

黒羽さんが小動物みたいに鼻をくんくんさせる。

「だーいじょうぶだーいじょうぶ。むしろ焦げてないとカラメルじゃない」

その結果。

カラメルは焦げた。

見事に真っ黒になり、鍋にはりついてしまいましたとさ。

「気を取り直して、プリンを作ろう」

焦げた鍋を洗い終え、ぐったりしていた部長が復活。

しかし、問題発生。

誰一人として卵をうまく割れない。

卵液の中にはたくさんの殻が入っている。

「大丈夫だ、濾せばなんかとなる」と部長。

なんとかプリン液はできあがり、型に流し込む。

本当は型には先にカラメルが入るのだが、さきほど排水口に流れていったのでしかたがない。

オーブンで蒸し焼きにして、冷ましてから冷蔵庫へ。

そして、ようやく試食タイム。

プリンは、すが入っていて見た目は悪い。

でも、問題は味！　と言わんばかりに私たちはプリンを一口食べる。

……うん、これは美味しくない。

なんというか激まずでもないんだけど、美味しくない。

そもそも、すが入ってるせいで口当たりが悪い。

さすがに部長がこう言った。

「タピオカミルクでいくか……」

「そうですね」

私と黒羽さんは大きく頷いた。

なぜ、プリンが簡単に作れるのだと料理ができない私たち思ってしまったのだろう。

全員が黙りこんで、調理室が一気に静かになる。

沈黙に耐えかねた私は、わざと明るい声をつくってこう聞いてみた。

「もしかして、タピオカは手作りですか？」

「タピオカはスーパーで売ってるから大丈夫だ」

部長は、「あとは牛乳だなあ。最高の牛乳を用意したいよな」と呟く。

「でも、タピオカミルクじゃあ寂しいわよね」

「ミルメーク入れちゃう？」

「なにそれ」

部長と黒羽さんが同時にこちらを見る。

私は慌てて説明をした。

「えっ？　小学校とか中学校の頃に出なかった？　牛乳にさ、ミルメーク入れるとココア味になるの」

「牛乳に入れる？　ストローの穴から？」

「こぼれるんじゃない？」

「ああ、こっちの給食は牛乳は瓶じゃなかったんですね……」

「なにっ？」

部長が立ち上がり、私は思わず後ずさる。

「な、なんですか？」

「知立さん、貴重な牛乳瓶経験者か」

「経験者って……」

「その、牛乳のフタとか集めていなかったか？」

「捨ててましたね！」

私がきっぱりと言うと、「そうか」と部長は唇を噛んだ。

牛乳のフタ、何につかの？

コレクション？

わからないなあ。

お祭りがもう来週末に迫ったある日。

私は校舎の２階の廊下を歩いていた。

２年１組、つまり、部長のクラスに行くためだ。

理由は、昨日、部長が部室にペンケースを置いていったから。

本当は黒羽さんに届けてもらって、ついでに会話でもしてきたらいいのに。

そんな気持ちをこめて気づかないふりを決め込んだ。

黒羽さんは最後まで長机に置きっぱなしのペンケースの存在には気づかず、仕方なく私が届けることにした。

別に、今日、部活の時に本人が気づけばよかったんだろうけど。

だけど、ないと困るだろうと思ったので、しかたなく届けにきたのだ。

２年１組の教室に来たものの、ここで大声で『部長ー』と呼ぶのは無理。恥ずかしい。

でも、見知らぬ２年生に声をかけるのもなかなか勇気が必要。

すると私がオロオロしているのに気づいた男子が、話しかけてきた。

「なに？　何か用事？」

ちょっとチャラそうな雰囲気だったから、あまり目を合わせないようにしつつ答える。

「はい。高原先輩に」

「高原？　あーあ。潮ね」

すると、別のチャラい男子が話に加わってくる。

「なになに？」

「この１年生、牛男に用事があるんだって」

「へえ？　なに？　牛男に告るの？」

「いやー。あんな、牛乳命のぼっちに告る女なんかいねーって」

笑い合う男子にムカッとして、そいつらを押しのけて怒りに任せて教室を覗く。

すると、窓際の席にぽつんと部長が座っている。

チャラ男たちが言うように、本当にぼっちなんだ。

私もぼっちだから、彼が一人に慣れている雰囲気がわかる。

友だちいるって言ってたくせに……。

強がりかよ。

私はなんだか、無性に部長に親近感がわいて、すうっと息を吐く。

「部長ー！　ミルク部の部長ー！」

私の大声に、教室にいた2年生たちが何事かとこちらを見る。

そして部長もこちらを見て驚いていた。

彼が席を立った瞬間。

「忘れ物でーす」

ペンケースを思いきり投げた。

部長はそれを見事にキャッチ。

「やりますね！」

私がにっこり笑うと、部長は優しく笑った。

「ありがとう」

その言葉に、「じゃ、失礼しまーす」と、私はそそくさと2年1組を後にする。

ここで発覚した新事実。

ミルク部は全員、ぼっち。

でも、ぼっちも3人集まれば、お祭りに出店もできてしまう。

うん。お祭り、頑張ろう。

私はそう決意して、拳にぐっと力を込めた。

教室に入った途端、明井たちのグループがこちらをニヤニヤしながら見ている。

お前たちなんかミルク部より浅い仲だろうが。

近いうちに、きっと亀裂入るぞ。

そんなことを思っていると、明井がやけに楽しそうにこう言った。

「知立、失恋決定だねー」

ぴくり、と耳が動く。

「ほーんと。かっわいそー」

「八汐、婚約したらしいじゃん」

その言葉に、私は無意識のうちに明井のグループに向かっていった。

そして、私は明井に顔を近づけて言う。

「はあ？　婚約ってなに？」

「顔近いんですけどー」

「目合わせろ、おい、私は合わせてやってんだろーが」

「うっざー」

「私もおめえがうぜえよ。でも今はんなことどーでもいい。八汐先生が婚約ってなんだよ」

私がそう言っても明井は目を合わそうとしない。

しかし、こちらがてこでも顔を離さないことを察したのか、しかたなく口を開く。

「さっき職員室で聞いたのよ！　田中が八汐に『婚約おめでとうございます』ってデカい声で言ったの」

その言葉を聞いた途端、私は教室を飛び出す。

職員室の自分の席に八汐先生はいた。

私は八汐先生に聞く。

「あの、先生」

「んー？　なんだ？」

私は先生の顔を見た途端、聞く勇気がくじけそうになる。

でも、本当かどうか確かめたい。

私は勢いよくこう聞く。

「先生、婚約したって本当ですか？」

「ああ、そのことか……」

どうか、否定して。

根も葉もない噂だって言って。

それとも明井の思いつきだけのくっだらない冗談とか。

そんな期待は、先生の表情で粉々に砕けた。

「なんだ、もうバレてたのか」

「じゃあ……」

「ああ、先週末に婚約したんだ」

そう言った先生は幸せそうな笑顔を見せた。

こんな先生の表情、初めて見る。

「あんまり他の生徒に言いふらすなよー。からかわれるのが厄介だ」

そんな先生の言葉など、耳に入ってこない。

私はふらふらと職員室を出た。

その日の放課後。

私はミルク部へは行かなかった。

ヒトカラに行くわけでもなく、家に返って自室でぼんやりとする。

もうミルク部は退部しよう。

お祭りは……こんな状態の私が手伝っても足手まといになるだけだろうし。

そもそも、お祭りに八汐先生が来るのも、どうでいもいいや。

顧問が八汐先生。

それもどうでもいい。

学校も行きたくない。

大好きな八汐先生に会えないのは寂しいけど、顔を見るのも辛い。

ああ、そうか。

私、やっぱり八汐先生を好きだったんだ。

だから、婚約をしたって聞いてすごくショックを受けてる。

そう、私は八汐先生が好きだから。

唯一、私の味方をしてくれた大人だから。

恩人だから、すごく好きだった。

そこで私はふと気づく。

私のこの気持ちは、八汐先生への気持ちは、恋だよね？

明日はとうとうお祭りだ。

だけど、私はもう丸２日、ミルク部に顔を出していない。

何度も黒羽さんに呼び止められたけれど、「ごめん」と言って振り切っている。

そして今日もそうするつもりだ。

申し訳ないけど、私はあそこにいられない。

そもそも八汐先生目当てに入部したんだから、また帰宅部に逆戻りが自然なのだ。

だから、放課後になると、そそくさと教室を出る。

すると、誰かにぶつかった。

「ごめんなさ……」

そう言いかけて、逃げようとすると腕をしっかりと掴まれる。

「部長として、きちんと話をしておくべきだと思ってね」

部長はニコニコしながら続けた。

「私もう、ミルク部には……」

「何言ってるんだよ」

部長は少し照れくさそうに続ける。

「君は1人の部員の前に、俺の後輩だろ」

「それは、そう、ですけど」

「じゃあ、とりあえず部室へ行こう」

私は断るひまもないまま、部長に腕を掴まれて、ずるずると廊下を進む。

そして、「あっ、ごめん。つい」と言って慌てて手を離した部長の慌てっぷりにも、耳まで真っ赤になった部長の後ろ姿にも気づかなかった。

私はもうミルク部を退部する話をするために、部室に行こうとしか考えていなかったから。

色々と考えたいから、部活動はしばらくいいや、という結論を出したのだ。

「失恋おめでとう」

部室に入るなり、部長がそう言った。

黒羽さんはどうやらいないようだ。

「は？」

「いや、だから失恋おめでとう」

「2回も繰り返さないでください」

「聞こえてなかったのかと思って」

「聞こえてましたよ」

私は大きなため息をついて、俯いたまま聞く。

「知ってたんですか？」

「えっ？　それは八汐先生の婚約のこと？　それとも知立さんが八汐先生が好きだということ？」

「後者ですね」

「知ってるもなにも、バレバレだし隠す気もなかったんだろ？」

「そうですね」

部長は困ったような顔をして、椅子に腰掛ける。

私も部長に続いて椅子に座った。

部室が沈黙に支配される。

沈黙を破ったのは部長だった。

「まあ、失恋って辛いからなあ。気持ちもわかるけど」

「そうじゃないんです」

「ん？」

「私、実は八汐先生が婚約したことはあんまりショックじゃないって気づいたんです」

「そうなのか？」

「最初に婚約をしたと聞いた時はショックでしたよ。でも」

私はスカートをぎゅっと握ってから続ける。

「一人で考えていくうちに、八汐先生への想いが恋愛感情じゃなかったことに気づいたんです」

「恋じゃないのか？」

「正確には、恋に恋してた、って気づいたってゆーか、八汐先生は恩人ではあるものの尊敬とあこがれという感情というか……」

「なるほど」

「私、ずっと八汐先生を好きな気持ちをエネルギーにして、高校生活を乗り越えていこうと思ったんです」

「乗り越えるってゆーか、楽しめよ」

「でも、ぼっちとか悪口とか、そういうのは乗り越えるべきですよね」

「ああ、まあ……」

「だけど、その気持ちは、ただ恋に恋してただけなんです。嘘の気持ちだったんです」

私がそう言い終えると、部長は考え込んだ。

それから、「嘘じゃないだろ」と独り言のように言う。

そして私をまっすぐに見て続ける。

「それも恋の一部だよ」

部長の瞳があまりにもまっすぐで、おまけに真面目な顔をしていたもんだから。

「ぶふっ」

思わず私は吹き出してしまった。

「な、失礼な！　人が真面目な話をしているのに」

「牛乳しか愛せないのに……」

私が笑いながら言うと、部長は即否定してきた。

「それはない！」

「人間の女子も愛せるんですか？」

私の言葉に、部長は急にこちらから視線をそらす。

「う……。まあ、そう、だな」

「えっ、じゃあ、じゃあ、おススメの女子がいますよ！」

「急に元気になったなー」

「だって恋に恋してただけですからね」

「立ち直り早っ！」

そう言って笑った部長は、なんだかやけにうれしそうだった。

その無邪気な笑顔は、どこか見覚えがある。

なんで見覚えがあるんだろう。

私は、思わず疑問をぶつけるべく口を開く。

「部長と私って」

そう言いかけた時、がらりと部室のドアが開いた。

入ってきたのは黒羽さんで、私を見るなり、「ああっ！」と声を上げる。

痴漢を見つけたかのように、ずかずか近づいてきて、私の肩を揺さぶった。

「なんでずっと来なかったのよおおお」

「ごめーーーん」

「失恋ぐらいで部活休むんじゃないわよおおお」

「ごめ、ってか、黒羽さんにもバレてるーーー」

「あの態度でわからないほうがバカだと思うわ！」

ひとしきり私を責め終えたらしい黒羽さんは、手を止めて部長にこう言った。

「ソフトクリームメーカー、パ、父が知り合いの人から買えたそうです」

「おお！　本当か！」

黒羽さんはスマホをしまいながら「これでメニューが３つになりましたねー」と笑う。

「え、メニューってタピオカミルクの？」

私が聞くと、部長が大きく頷く。

「ああ、さすがにタピオカミルクオンリーじゃあ寂しいし、俺は十分だが、他の人のことを考えるとな」

「そう。だから、ほら、前に知立さんがミルメーク？　がどうとか言ってたから、冷たい牛乳に溶ける粉はないかなって探したのよ」

「１つはインスタントコーヒー。冷たい牛乳にも溶けるタイプな」

「それで、ソフトクリーム乗せたいですねーってことになって、パ、じゃないわ、父が無事にゲットしのよ」

「そうだったんだ……」

「もう明日が本番だ！」

部長の言葉に、「そうですね」と黒羽さんが頷く。

私は参加してもいいのだろうか。

２日逃げてしまったのに。

その思いを見透かしたように、部長が言う。

「明日は逃げられないからな。足に紐つけてでも連れて行く」

「むしろ、私も参加していいんですか？」

「当然でしょ？　たっぷりと働いてもらうわ」

黒羽さんがふふんと笑った。

私は思わず土下座をする勢いで謝罪する。

「なんかもう、本当にごめんなさい。精一杯、働かせていただきます！　パシリもやります！」

「知立さんのその低姿勢、なんだか心配になるんだが……」

「ええ、本当に」

部長と黒羽さんに心配されてしまった。

でも、心の中は清々しいくらいに晴れやかだ。

部活が終わって、昇降口へと急ぐと、「知立」と呼び止められた。

私は動きをピタリと止め、ごくりと唾を飲み込んだ。

振り返らなくてもわかる。

もうわかってしまう。

息を大きく吸って、それから振り返る。

精一杯の笑顔をつくって。

今日の八汐先生は、薄いグレーのスーツ姿。

なんだか、高砂の新郎に見えなくもない。

そんな先生を見て、やっぱり複雑な気持ちになる。

やっぱり、一応、少しは恋してたんだと思うと、ホッとするのはなんでだろう。

「知立、ちょっと時間いいか」

「はい」

「じゃあ、ついて来い」

そう言って連れて行かれたのは、相談室だった。

家に帰って、自室に戻った私は灯りもつけずにベッドに寝転ぶ。

さっきの先生の話は、本当に驚いた。

まさか、そういうことがあっただなんて……。

本人は何も言わなかったのに。

いや、言えないか。

わざわざ言ったら、恩着せがましいからね。

だけど、別にさらっと言ってくれても良かったのに。

そしたら、お礼言うし、すんなり入部したし。

なんで黙って何もないふり、してんのよ。

「変態め！」

私はそう言ってぐーで枕をぽふっと殴る。

ふと枕に浮かんだのは、部長の顔。

「だからどうしろっつーのよおおお」

私はそう叫んで枕をぼかぼかと殴る。

「春香ー！　うるさいわよー！」

階下からの母の声に私は黙りこんで、そのまま枕に額をつけた。

うう、明日、部長に会うのなんか気まずいなあ。

＝＝

３．千本松牧場

＋＋

土曜日は朝８時に近くの公園に集合。

そこから自転車で千本松牧場へ向かうと思いきや、公園の駐車場には何やら車が止まっていた。

うっかり傷をつけようものなら、我が家が破産するほどの修理代を払わされそうな高級車。

普段なら絶対に近づかないけれど、そういえば今日は公園から黒羽さんのお父さんが千本松牧場まで乗せていってくれるんだっけ。

ああ、あの車っぽい。

そう思っていたら助手席から降りてきたのは、制服姿の黒羽さん。

「さ、部長も知立さんも乗って乗って」

続いて運転席から出てきたのは、かっちりとしたスーツの似合うおじさま。

恐ろしいほど整った顔立ちのおじさまは、誰かに似ている。

「はじめまして。黒羽苺の父です」

「はじめまして。ミルク部部長の高原潮です」

「部員の知立春香です」

部長と私が自己紹介を終えると、黒羽さん(父)はぱあっと顔を輝かせる。

「おお、お２人が例の――」

「もう、パパ！　無駄話はいいからさっさと行くわよ」

「そうだったね。ささ、２人とも後部座席にどうぞ」

言われるがままに私と部長は後部座席に乗り込む。

見た目からして近づきにくいほど、というか見慣れないレベルの高級車。

中は随分と広々としていてシートはものっすごい座りご心地がいい。

車内で流れているのは、レディオベリー。

さすが栃木県民だなあ。

「すごいなあ」

部長がぽつりと呟いたので、私は頷く。

「ですね」

そう言ってふと部長に視線を向けた。

後部座席も前と同様、１人１人のシートが独立している。

だから一定以上、距離が近づかないのがいい。

……って、別に部長と遠かろうが近かろうが、どうでもいいんだけど。

「ああ、ソフトクリームメーカーはトランクに積んであるからね」

黒羽さん(父)がニコニコしながら言う。

すかさず部長が答える。

「ありがとうございます。お金は後で払いますので」

「ああ、お金なんかいいのいいの。このソフトクリームメーカーはお祭りが終わったら、我が家で預かるからね」

「えっ？　でも、それはその……」

「いいんだよ。娘が楽しそうに部活動をしているのは初めて見たからね。その笑顔が見られただけで十分、おつりがくるよ」

「ちょっ……。パパ、あんまり余計なことを話さないで」

「あはは。うれしくて、ついね。だからさ、お金は気にしないで。高校生の君たちは勉学と部活動に励んでいればいいんだよ」

「ありがとうございます」

部長に続いてお礼を言う私に、黒羽さん(父)が冗談交じりに言う。

「えっと、高原君、だったかな？　君、しっかりしてるねえ。家に養子に来ない？」

「養子？」

「そう。苺のお婿さんにいいなあって」

「本当にパパ、フザけるのもいい加減にしてよ」

「いやー。ごめんごめん。なんだかパパまで若返った気分で、ついついはしゃいじゃったよ」

「もー。明日のデ……。東京日帰り旅行なしにするわよ」

「えっ？　さすがにそれは勘弁してよ。パパ、ここ最近、明日が楽しみで仕事頑張ってたんだから」

「どうしよっかなあ」

そんな楽しそうな親子のやりとりに、私は思わず微笑んでしまう。

そっか、黒羽さん、ミルク部のこと、ご両親に楽しそうに話してるんだ。

だけど、部長のことはどう話しているんだろう。

好きな人、って言ってるのかなあ。

うーん、でも、この黒羽さん(父)の娘の溺愛っぷりからすると、そんなこと知ってたら部長に婿に来い、だなんて冗談でも言わないような。

まあ、この変態部長を婿にするのはどうかと思うんだけど。

でも黒羽さんは、部長が好きなんだよね。

そう思って部長をちらりと見ると、ふと昨日のことを思い出す。

昨日、八汐先生に相談室に呼び出されて、何を聞かされるのかと思えば。

『実は、知立が1人で昼休みに校舎をウロウロしているのを最初に見つけたのは、俺じゃないんだ』

『えっ？　どういうことですか？』

『それが、高原なんだよ』

『部長ですか？』

『そう。職員室に来てわざわざ教えてくれたよ。1年1組の知立さんがお昼休みに1人で寂しそうにしている、なにかあったんじゃないですか、って』

先生はそこまで言ってから、『俺はそこで初めて気づいたよ』と自嘲する。

そして、コツコツと指で机を叩いてから続けた。

『それで、知立をよく観察していたら、明井たちに色々と言われているってことがわかったんだ』

『部長はそんなこと、一言も……』

『だから俺は知立にミルク部を勧めたし、顧問にもなった。高原への恩は返さないとな』

『じゃあ、部長は偶然、1人でいる私を見て、それで先生に伝えたんですね』

私がそう言うと、八汐先生はキッパリとこう言う。

『偶然、か。違うと思うがな』

『えっ？』

『理由があるから、知立を見つけられたんだと俺は思うけどな』

先生は意味深な笑顔を見せて、席を立った。

つまり、私がぼっちでいたのを救ってくれたのは先生じゃない。

もちろん先生のおかげで、頑張れたのだと思っている。

だけど、部長が私を見ていてくれなかったら、もしかしたら誰にも気づいてもらえなかったのかもしれない。

私はずっとずっと1人だって思い込んで、灰色の学校生活まっしぐら。

最悪は登校拒否にだってなっていた可能性だってある。

それをちゃんと見ていてくれた人がいた。

その人が高原先輩だとは、にわかには信じられないけれど。

千本松牧場へ着いて、私と部長は黒羽さん(父)にお礼を言って会場へと向かう。

石畳の妙に懐かしい雰囲気の並木道を歩いていると、ふと思い出す。

ああ、そうだ。

ここ小さい頃に家族で来たことがある。

那須旅行をしたのは、確か7歳くらいのはずだ。

そっか、千本松牧場に来たんだ。

ああ、あの頃と全然、変わってない。

なんとなくまだ引っかかっていることがある気がして。

でも、それが大事な気がして。

だけど、どうしても思い出せないから、「まあいいや」と呟いて、お祭りの会場へ。

既に会場のあちこちにはテントが設営されている。

広場の外周をぐるりと囲むようにテントや移動販売車が準備を始めていた。

「えーっと。ここか」

出入り口から少し離れた場所で部長が立ち止まる。

テントを設営して、それからダンボールに色紙を張って油性マジックで大きく『タピオカミルク』と書かれた看板を立てかける。

「なんかちょっと地味だったわね」

黒羽さんがうーんと独り言のように呟いた。

「いやいや。大丈夫だ。高校生がやってるっていう珍しさと、あと牛乳の力でなんとかなる」

「部長、相変わらず楽天家ですね」

私が呆れつつ言うと、部長はニコニコしながら答える。

「まあ、楽天家ってのは長所だからな」

「……前向きなんですね」

「前向きも長所だな」

「そうですね。でも部長は……まあいいや」

「途中でやめないでくれ。なんか気になる」

「そんなに罵倒されたいんですか？」

「ああ、じゃあ、いいや」

部長は私のそばからすーっと離れた。

その背中を見ながら思う。

この人が、私を見てて、八汐先生に伝えてくれた、ねえ……。

先生、人違いしてるんじゃないかなあ。

部長の予想は大外れだった。

高校生だと目立つようにわざわざ制服で来たものの、エプロンで隠れしまっている。

そもそも場所が悪い。

ちょうど出入り口から死角になる場所だし、おまけに左隣の屋台はケバブ。

豪快に肉を切るパフォーマンスはものすごい目立つ。

そして、右隣はカレー屋でカレーの良い香りが充満していた。

そんな最強のテントが左右にある場所を引き当てた部長が悪い。

彼の運が悪いせいで、さっきからタピオカミルクは２つしか売れないのだ。

しかも、お隣のカレー屋のお姉さんが『じゃあ、２つもらっちゃおうかな』とタピオカミルクコーヒーのソフトクリーム乗せを頼んでくれた。

１番高いやつを買ってくれたのだ。

絶対にこれ、気をつかわれている。

そう思ったけども、私たちは誰もそれを口にしなかった。

ケバブ屋もカレー屋も行列ができる中、ミルク部のタピオカミルクは秒で買えるよ！

だって誰も待ってないんだもん。

「カレー屋はカフェオレ売ってるし、ケバブやにいたってはタピオカミルクティーを売っていた」

敵情視察をしてきた部長がため息まじりにそう言った。

「あと、ここ以外にもタピオカミルクティー専門のテントは２つ、それからクレープ屋とたこ焼き屋、那須バーガー屋もタピオカミルクティーがメニュに―あった」

「５軒もあるんじゃあ、見向きもしてくれませんね」

私はそうぼやいて、目の前を見つめた。

まだお祭りが始まって１時間も経過していないというのに、広場にはたくさんの家族連れやカップル、学生同士の友だちグループなどで賑わっている。

こんなにお客がいるのだから、誰かが買ってくれてもいいのに。

立ち止まるのは、９割方男性で黒羽さんを見て「うおお。すげえ美少女」と驚いて立ち止まる。

「お前、声かけてこいよー」「やだよ、どうせ相手にされないしー」とかなんとかやって、そのまま名残り惜しそうにこちらを見て歩いて行ってしまう。

もう、そのやりとりを何度見たことか。

黒羽さんは、相手がお客だから睨み返すことも、『消えろ』とか言うわけにもいかず、ただ黙っていた。

だから私が彼女を背中で隠したわけなのだけど。

そうなると今度はむしろ誰も足を止めなくなる。

たまーに同じ年くらいの女の子たちが、「あ、あの人ちょっとイケメンじゃない？」「えー？　ああ、まあ」と部長を見ていくだけ。

誰もタピオカミルクのことには触れないし、ましてや買ってくれる気配がない。

もうすぐお昼になろうかという頃。

「調子はどうだ」

そう言ってやって来たのは、見覚えのある男性。

八汐先生だ。

隣にいるきれいな女性が「はじめまして」とにこやかに笑う。

「この人が俺の、婚約者だ」

照れたように言う先生を見て、ちょっとズキッと胸が痛む。

でも、一方で冷静な自分が脳内で声高に叫んでいる。

先生の私服ダサい！　と。

だって、襟がクタクタで色あせた水色のポロシャツに、濃いベージュのチノパンに、極めつけは小脇に抱えたクラッチバッグ。

こういう集金のおじさん、いるいる。

そういういで立ちをしていたのだ。

隣の婚約者の人は、ボーダーの七分袖シャツにデニムのふんわりとしたロングスカートに、カーキ色のショルダーバッグを肩にかけている。

彼女は普通にオシャレなのに。

いや、だからこそ、八汐先生のダサさが目立っているのかもしれない。

私がこんな服装で八汐先生がデートに現れたら、ガッカリするだろう。

それも含めて、恋に恋していたんだなあと気づく。

「いらっしゃいませ。婚約者の方にはサービスしますよ」

私がそう言うと「あら、うれしい」とふふと婚約者の女性は微笑む。

「俺はサービスなしか」

「じゃあ、２人まとめてサービスで」

部長の言葉に、「いや、いい。普通に買う」と先生は少しだけ笑う。

そして２人そろってタピオカミルクカフェオレを２つ頼んでくれた。

「ちなみに、どのくらい売れた？」

先生の言葉に、私たちは顔を見合わせる。

「先生たちで４つですね」

「少ないな」

「場所が悪いんです。ってゆーか、部長の引きが悪いんです」

私がそう付け加える。

「うーん。どういう理由にしても、客引きはしたほうがいいかもしれんなあ」

先生は顎に手を当てて考え込んだ。

「まあ、なんとかしますよ。先生はデート楽しんでください」

部長はそう言ってにっこりと笑う。

黒羽さんがチラチラと私を心配そうに見ているのがわかる。

ああ、きっと私を心配してくれているのかな。

先生の壊滅的なファッションセンスに気を取られているだけで、ショックはあまり受けていない。

だからこそ、黒羽さんに気をつかわせているのは申し訳なくなる。

先生たちが人ごみに消えると、「さて」と部長が言う。

「もうすぐお昼だから何か買ってくるよ」

「ああ、それなら私が行きますよ。何もしていませんし」

「それはまあ否定しないけど、俺がいるより女子２人がいたほうがお客も買いやすいだろ」

部長は、「なにがいい？」と聞いてくるものの、一体どんな屋台があるのかわからない。

考え込む私たちを見て、部長はスマホを見せながら言う。

「じゃあ、決まったら連絡してくれ。連絡がなければカレーライス」

それだけ言うと、部長は屋台から出て行った。

「大丈夫なの？」

黒羽さんが部長が歩いて行ったほうを見つめながら、ぽつりと呟く。

「大丈夫でしょ。さすがにお昼買いに行くって言いながら牛乳買ってこないだろうし、そもそも私たちが何も連絡しなければカレーって」

「そうじゃなくて、八汐先生のこと」

「ああ」

私は頷いてから答える。

「大丈夫ってゆーか、まあ、なんかこう、そんなに好きじゃなかったというか、恋に恋してただけだから平気」

「そう……。ちょっと心配だったのよ」

「ありがとう。ごめんね、心配かけちゃって」

「でも、こういうことはもっと、学校で話せたらいいなあって、そう思うのよ」

黒羽さんが大きな瞳をこちらに向けて続ける。

「私はどうしても勇気が出なくて、知立さんをお昼に誘えないの。休み時間に声をかけることもできない」

「私だって、黒羽さんに教室でなかなか話しかけられないよ」

「そうだったの？　なんで？　気軽に話しかけてくれていいのに」

「それはこっちの台詞だよ」

私が笑うと、黒羽さんも笑ってから続ける。

「私ね、昔から人の輪に加わることが苦手だったの。女子からどうも嫌われるタイプみたいで」

それはたぶん、美少女だから一部の女子に妬まれたり、隣にいたら私のかわいさが引き

立たないとか思われたりするのだろう。

もちろん、そんなことは口にしないけども。

「私も昔から1人ばっかりだったよ。愛知の小学校の時は友だちがいたこともあったけど、高学年の頃は始業式に風邪で休んで登校したら、もうグループができててさ」

「わかるわ」

「中学でこっちに引っ越してきた時も、もちろん知ってる人なんか誰もいなくてね。結局、1人だった」

「高校では私のせいで、知立さんまで……」

黒羽さんがそう言って目を伏せる。

「そんなの大丈夫だよ。どうせならさ、良いことして完全に孤立してやろうって思っただけだから」

私はそこまで言ってこう付け加える。

「ただの自己満足だから気にしないで」

「それがたとえ、自己満足でもいいわ」

黒羽さんは顔を上げてから続ける。

「だって、かばってくれてうれしかったから」

彼女はそう言ってやさしく微笑む。

それから黒羽さんは静かに続けた。

「悪口を言われるのも、慣れたはずだと思っていたわ。でも言い返してもやめないし、なんか疲れちゃったのよ。高校に来ても、これか、って」

「うん。慣れないよね」

「そうなの。だから、かばってくれてうれしかった」

黒羽さんはふふっと笑ってから、ちらりと後ろを振り返ってから続ける。

「中学校の時は、男子に絡まれている私を部長が助けてくれたわ」

「えっ？　そうなの？」

「そうなのよ。『かよわい女子をイジメてないで牛乳を飲め』ってものすごい勢いでその男子たちに牛乳を勧めていたわ」

「……想像できるなあ」

「だから、部長のことが好きなの」

あら、今さらっと告白。

そんなことを思う私を見て、黒羽さんは続ける。

「もちろん、知立さんのことも好きよ」

「はい？」

私は思わず首を傾げた。

ん？　好き？

部長も私も、好き。

……それって、つまり。

「もしかして、それは友情の『好き』？」

「そうだけど」

「部長のことも？」

「当然、友情よ。恩返しにミルク部に入ったようなものよ」

「あー……そうだったんだ」

「なに？　もしかして恋愛感情だとでも思ってたの？」

「部長への気持ちは恋愛感情かと」

私が頷くと、黒羽さんはきょとんとしてから笑いだす。

「ありえなーい。ものすごくありえないわ」

彼女はひとしきり笑ってから、声のトーンを落としてこう言う。

「私の好みの男性はね、ビッグイヤー佐藤さんよ」

「えっ？　誰それ」

「あなたねえ、レディベリーくらい聞きなさいよ。佐藤さんはレディオベリーのＤＪなのよ」

「そ、そうなんだ」

「まさか、レディオベリー、一度も聴いてない？」

「ちょこっと一度だけ聴いたことなら……」

「ちょこっとじゃダメよ。あなた、まだ心は愛知県民なんじゃないの？」

黒羽さんの言葉にドキッとする。

痛いところをつかれた。

私が何も言えないでいると、黒羽さんはやけに穏やかな声で言う。

「故郷を捨てろだなんて言わないわ。でもね、栃木もいいところだから、馴染んでみたらどう？」

「そうだね。本当に」

私はなんだか妙に納得してしまった。

そうだ、愛知に未練タラタラでしがみついているのは私のほうだ。

地元愛なんてそれほど強くないくせに、愛知に未練あるからと言って那須を拒否していた。

それは、那須が嫌なんじゃない。

新しい場所に飛び込む勇気が、でなかっただけ。

栃木のほうから拒否されるのが、怖かったから。

でも、自分から飛び込んでいかないと。

そして馴染んでいかないと、私はどこへ行ってもぼっちになってしまう。

結局、私と黒羽さんが話に夢中になっていたので、部長はカレーライスを3人分買ってきた。

しかも隣の屋台で買ってきて、ものすごくサービスもしてもらってきたのだ。

なんだかやたらと美味しいカレーを食べ終え、どうせ減らないからとタピオカミルクを飲んで、午後に挑んだ。

やっぱりお客は来ない。

私は何かできないものかと考える。

この屋台にまったく貢献できず、売れなかったねで終わりたくない。

そう思ってお祭りのチラシを見ていたら、「あ」と声が出る。

午後１時から素人参加型のカラオケ大会がある。

しかも、飛び入り参加大歓迎だって。

でも、カラオケかあ。

ヒトカラばかりの私が、いきなりこんな大勢の前で歌えるだろうか。

緊張で声がひっくり返るかもしれない。

そんなふうになったら、歌えなくなりそうだ。

いや、むしろ声がひっくり返って、恥をかいたほうが、目立てるしいいのかもしれない。

だってタピオカミルクの宣伝をしたいんだから。

私は腹をくくって、エプロンを外し、「ちょっと宣伝してきます」と屋台を出た。

舞台に上がると、予想以上に大勢の人がいた。

こちらを見ている人が１/３(カラオケの参加者と関係者)、２／３の人は屋台しか見ていない。

それでも、マイクを持つ手は震え、足も震える。

伴奏が始まった。

たくさんの目がこちらを見ている。

まるで、あざわらっているかのように。

いや、考え過ぎなのはわかっている。

わかっているけれど、どうにも逃げ出したい気持ちになっていた。

腹をくくったくせに、いざステージに上がるとこんなに緊張するだなんて。

全然、知らなかった。

ああ、もう歌いだしが近い。

でも、歌うだなんて無理無理。

こんな中でヒトカラしかしていない私が歌えるわけなんて……。

そう思って『やっぱりやめます』と言おうとした瞬間。

「知立さーん！　がんばれーーー！」

声のしたほうを見ると、ステージの最前列に部長とその隣には黒羽さんがいたのだ。

まったく気づかなかった。

「知立さん、あなたの美声を披露してやりなさい！」

おいおい黒羽さん、めっちゃハードル上げたなあ。

私は思わず笑ってしまい、途端に緊張がほぐれた。

大丈夫。私には強い味方が２人もいる。

そう思うと、自然と声は出た。

いつものように歌えたのだ。

辺りが急に静かになり、「おお」とか「うまいなあ」という声が聞こえた。

自分の声が風に乗って遠くまで響いていくようだ。

この開放感、なんて気持ちいんだろう。

ヒトカラじゃあ味わえない。

大勢の人がこちらを見ている。

足を止めていく人もがいる。

私の歌声を笑顔で聴いてくれている人が視界に入るたびに、何とも言えない高揚感が全身をかけ巡った。

そして、歌い終えると、大きな拍手がわき上がる。

私はお辞儀をしてから、すうっと息を吸う。

「タピオカミルクの店をしていまーす。ぜひ、来てくださーい！」

そんなわけで、最初はあの宣伝で人がくるのだろうかと不安だった。

でも、行列ができたのだ。

歌のあと、長い行列ができて、それからも「あ、さっきの歌うまい人」と足を止めてくれて、お客もなかなか途切れなかった。

しかも、タピオカミルクを飲んでいる人がいると、珍しそうに近づいてきて買ってくれる、というお客が自然とサクラになってくれる現象まで起きていたのだ。

そうこうしているうちに、午後４時には無事に完売した。

私と部長と黒羽さんは、ハイタッチして喜んだ。

「知立さん、歌すっごいうまいんだねー」

屋台を片づけていると、そう言ってニコニコしながら近づいてくる男性。

「えっ？　パパもしかしてずっといたの？」

「実はねー。最初は車にいたんだけど、暇になってきたんだよ」

黒羽さん(父)は、「心配になっちゃってね」と笑う。

なかなかの親ばかっぷりだ。

「青春だよねー。もう僕はそんなキラキラした時代からずいぶんと遠のいちゃってるから、君たちがまぶしいよ」

黒羽さん(父)はそう言うと、ひょいとソフトクリームメーカーを運ぶ。

それから荷物は黒羽さん(父)と部長が車に乗せてくれた。

もともとそれほど荷物はなかったものの、やっぱり男の人が２人いると違うな。

助手席に乗りこもうとする黒羽さんを見て、部長が口を開く。

「僕と知立さんはバスで帰りますよ」

「え？　まだ後部座席は余裕で……」

黒羽さん(父)はそう言いかけて、「ははーん」と何やら頷く。

「なぜ私も巻き込まれているんですか」

「知立さんはここのソフトクリームを食べたことがないだろう？」

突然、部長にそう言われて私は記憶をたどる。

ここへ遊びに来たけども、ソフトクリームを食べたかどうかまでは覚えていない。

「さあ、ここに家族旅行へ来たのは９年も前もことですし、食べても覚えてないですよ」

「じゃあ、食べたことがないと同じだ。食べたほうがいい！」

そう言う部長に黒羽さんが顔を出して、「そうね、栃木県民として食べたほうがいいわ」と口を挟む。

「じゃあ、黒羽さんも一緒に」

「これから私はケーキバイキングなのよ」

あっさりと断った黒羽さんは、「疲れたから３０個は食べられそう」と呟く。

すごいな、大食い女王かよ。

「じゃあ、ま、頑張ってねー」

そう言うが早いか黒羽さん(父)は車のエンジンをかける。

ぴかぴかの高級車は駐車場を後にした。

「さあ、行こう」

部長はそう言うと、来た道を戻り始める。

もう疲れたんだけどなあ。

こうなったらもう付き合ってあげるしかないけども。

千本松牧場のソフトクリームは随分と量が多かった。

「太っ腹だろー」となぜか自慢気に、そしてうれしそうに部長が言う。

「味も最高なんだよ」と売り場の外のベンチに腰かける。

部長の向かいに私が座ると、さっそく２人でソフトクリームを食べた。

濃厚な甘さだけど、あっさりしているからどんどん食べ進められてしまう。

「これ、美味しいですね」

「だろー。やっぱ美味しい」

思わず無言でソフトクリームを食べてしまう。

疲れているから糖分を欲するのと、何よりもこのソフトクリームの甘さはくせになる。

最初は量が多い気がしていたが、気づけば完食していた。

「あ、写真撮り忘れてた」

私の言葉に、「次また撮ればいいよ」と部長が笑う。

「それもそうですね」

私はそう答えたものの、なんだか部長と一緒に来るような口ぶりだな。

「じゃ、次の場所へ行こう」

部長はなぜか慌てて立ち上がり、広場のほうへと歩き出す。

私も「待ってくださいよ」とその背中を追いかけた。

よくよく見ると、牧場には色々なものがある。

乗馬体験だけではなく、バンジートランポリンだの卓球だの、恐怖の館だの。

セグウェイカートまである。

なんだか遊園地みたいな場所だなあ。

7歳の頃に来た時は、エアドームでひたすら遊んで、何度もやりたがった記憶はある。

でも、こうしてよくよく見てみれば、色々なものがあったんだ。

私がキョロキョロしながら歩いている間に、牧場の道が途切れていた。

4．ミルク・クラウンを

部長は駐車場とは正反対のほうへを歩き出す。

左右にうっそうと木々の生い茂る道を進んで行く。

「ここも、千本松牧場の敷地なんですか？」

「そうだよ。この牧場、ものすごく広いんだよ」

「へえ」

昔、家族旅行でここへ来た時はここまで歩いたかな。

みんなでここを歩いた記憶はない。

だけど、この道にはなぜか見覚えがある。

私たちが歩く音だけが、静かな道に響いていた。

辺りには歩いている人はいなくて、周りは木々で囲まれているので、本当に恐ろしいくらいに音がしない。

しかも、いつもはなんやかんやと牛乳の話をしてくる部長が静かだし。

左手に見えた工場は何かと思えば、ホウライと書かれてある。

牛乳の会社だよね。

というか、千本松牧場の牛乳は全部ホウライなのか。

さっきのソフトクリームもここで作ってるのかな。

じゃあ、部長にとってはある意味パワースポットなのでは……。

しかし、部長は会社を一瞥するものの、完全にスルーだった。

ええっ？　拝まないの？　写真撮らないの？

驚いている私の心を見透かしたかのように、先輩が答える。

「ここはもう何度も来てるからね。写真もいっぱい撮ったし」

「そう、ですか」

黙りこんだ部長のつむじを眺めながら、私は辺りを見回して口を開く。

「あっ、この周りの木って、松ですかね。あ、だから千本松！」

「これは杉」

「……そうですか」

再び訪れた沈黙に、私は会話を提供するのをあきらめた。

きっと部長も疲れたのだろう。

それに、もしかしたらいつもは静かな人なのかもしれない。

そう思って黙ったまま歩いていると、不思議と心はざわつかなかった。

予想していたよりも、沈黙は嫌じゃない。

部長との沈黙が気にならないだけだろうか。

考えてもわからないので、私は黙って歩くことに集中する。

なにか話さなきゃ、と思うのをやめると気持ちが楽だな。

眼前に開けた場所がある所で、部長はようやく足を止めた。

広い敷地に、白い建物がある。

部長はウッドデッキに上がり、建物を眺めながら言う。

「あれが松方別邸。松方正義という人が、この牧場を開設したんだって」

部長はそこまで言うと、「まあ、ここにも書いてあるけどね」と白い看板を指さす。

ウッドデッキに立っている白い看板には、『萬歳閣ー松方別邸』と大きく書かれてある。

私は看板から建物、松方別邸の建物に再び視線を向けた。

白い木にグレーの屋根に、窓がたくさんついている。

思わず私はこう口にした。

「なんか、学校みたいな建物ですね」

すると、部長が笑う。

「同じこと言うんだなあ」

「なにがですか？」

「うーん。覚えてないかあ」

部長はちょっとガッカリしたように言うと、ベンチに腰かけた。

私は少し迷って、もう1つのほうのベンチに腰を下ろす。

「俺が８歳の時さ、ここで初めて、松方別邸を見てな」

「部長が言ったんですか？」

「いや、俺じゃない。知立さんだよ」

「えっ？　私？」

「小２の夏休みに、ここで『おー、なにあれすげえなあ』って見てたらさ、同じくらいの歳の女の子が来たんだ」

部長は続ける。

「その女の子、なんだか心細い顔してて、それで声かけたんだよ。そしたら迷子って言って」

私はそこで急に思い出す。

そうだ、私、乗馬やらない？　って相談し合う家族の目を盗んで１人で探検に来たんだ。

どんどん歩いて、歩いて、それでここにたどり着いた。

振り返ると誰もいなくて、不安になって。

でも、目の前に同じ歳くらいの男の子がいて、安心したっけ。

「思い出しました。その説はお世話になりました」

「いや、いいよ。別に大したことはしてないし」

「でも……」

私はそこで黙り込んでウッドデッキに視線を向ける。

「その時さ、知立さんはこの建物を見て、『あ、学校だ』って今と同じこと言ってた」

「そうでしたっけ？」

「うん、そうだよ」

部長は松方別邸のほうに視線を向けたままだ。

私は、おずおずと聞いてみる。

「私、ここのウッドデッキで転びましたよね」

そう言って、立ち上がって、ウッドデッキを歩く。

すると、うっかりつまづいた。

でも、私の顔がついたのは地面ではなく、部長の胸の中。

いつの間にか部長が私の前に回っていたのだ。

いや、回っていたのだ、じゃない。

なにこれ？

ちょっとさすがに高校生になってこれは……！

「まさか……またつまずくとは」

私が顔を上げると、部長の顔がすぐそばにあった。

部長は私の背中に回した手を離してくれない。

「あの時、俺は初めて恋をしたんだよ」

「誰にですか？　牛にですか？」

「失礼な。人間だ。そして君だ」

「そ、その冗談まったく面白くないです」

「冗談でこんなこと言っても意味ないだろう」

「私、そんな惚れられるような子ではなかったです」

「かわいかったんだよ」

部長はそう言ってから、さらに続ける。

「今もだけど！」

おお、まじかよ。

意味不明だよ。

かわいい？

初恋？

そんなバナナ。

むしろからかわれてんじゃない？

そうだよ、そうだよ。

部長は、からかってるんだよ。

冗談きっついなあ。

頭の中ではそんなふうに考えているのに、心臓はどんどん心拍数を上げていく。

「高校で再会できて、夢みたいだった」

「7歳の頃と、さすがに顔は変わってるはずですが？」

「いや、面影ありまくりだ」

「うーん……」

「初めて会った時に、名前も聞いて、愛知に住んでるって知ってたから。だから高校に入学してきた君のことをちょっと調べてみたら同一人物だった」

「ストーカーですか？」

「否定はしない」

「……否定、しましょうよ」

私がそう言ったところで、部長はようやく私を離した。

それでも、私は部長から遠ざかることはできず、その場で彼を見上げる。

「部長が、ぼっちでいる私を見つけてくれたんですね。２回も。１度目はここで迷子。２度目は学校で１人」

「君のことを調べるうちに、１人でいるし寂しそうだから、なんかあるなあと思って八汐先生に伝えただけだ」

「でも、そのおかげで、私、１人じゃなくなりましたよ」

「うん。悲しい顔で高校生活を送ってほしくなかったからね」

「本当は、ずっと１人でいる覚悟をしていました。でも、やっぱり本当は寂しいなって思ってて」

「うん。わかるよ。俺も１人にはまったく慣れない。慣れちゃいけないんだよ」

「そうですよね。だから、部長には感謝しています」

私がそう言うと、部長は少しだけ考えてからさらっとこう言った。

「感謝のしるしに、そうだな、付き合ってくれる？」

「どこへですか？　また牧場ですか？」

部長は頭を掻いて、それから答える。

「牧場デートも、悪くないな」

「デート？　え？」

「彼女に、なってくれないかな」

そう言った部長の顔は耳まで真っ赤だった。

私が口を開こうとした途端、右手でそれを制する。

「いや、返事は今すぐじゃなくてもいい。君は傷心中なんだし」

「でも、恋に恋してただけですし」

「それでも失恋は失恋だろう」

「そうですね」

「だから、ゆっくりと考えて返事をくれ」

部長は私をまっすぐ見てから続ける。

「いつまでも待ってるから」

「じゃあ、たっぷり考えますね」

私はそれだけ言うと、来た道を歩き出す。

「もちろん、前向きに考えます」と部長には聞こえないように、小さな声で言った。

春の風が、火照った頬には気持ちいい。

「苺ってさ、やっぱり、かわいいからそういう名前つけてもらえたの？　それとも『とちおとめ』から来てるの？」

ある日のお昼休み。

私は机を黒羽さん――苺とくっつけて、お弁当を広げていた。

「さあ。どうかしらね。名前の由来は聞いたことないわ」

苺がそう答えて考え込んだ。

不思議と私と苺が仲良く話し出すと、明井グループは何も言ってこなくなった。

平穏な昼休みを手に入れた私と苺は、ここ最近はずっとこんなふうに何でもない会話をしているのだ。

「ああ、そうそう。春香の名前って、栃木に由来があるのよ」

思い出したように苺がそう言った。

「ん？　誰かも似たようなこと言ってたような」

「そうなの？　まあ、うどは有名だしね」

「えっ？　うど？」

「そうよ、『那須の春香うど』っていう、うどがあるの。同じ漢字よ」

「うどかあ。ピンとこない」

「部長は那須高原の高原だし、潮にいたっては漢字が違うけど『牛』だわ」

「ああ、部長はそういう宿命に生まれたのかもね」

私はそう言って笑ってから、思い出す。

ああ、そうだ。

部長に名乗った時に、栃木っぽいと言われたんだ。

そういうことかあ。

なんだか、急に部長と話したくなった。

私は窓の外を見る。

しとしとと雨が降るグラウンド。

梅雨に入り、通学路では紫陽花がきれいに咲いている。

もたもたしていると、夏休みになってしまう。

私はまだ、部長に返事をしていないのだ。

でも、もう答えは決まっている。

放課後、私は2階の廊下を歩く。

2年1組の教室の前で、眼鏡をかけた男子と楽しそうにお喋りをする高原先輩がいた。

「おススメの牛乳のメーカーは色々とあるんだよなあ」

「おお、まじで？」

部長も気の合う友人を見つけたようだ。

私がまた後にするか、とその場を立ち去ろうとした時。

「知立さん」と部長が声をかけてくる。

「ああ、俺、じゃあ帰るわー」

部長の友人らしき男子は、やけににこにこしながら帰って行った。

「すみません、お話のお邪魔をしてしまって」

「いや、あいつ、何でも今日はデートらしいから俺が引き止めていただけだ」

「デート、ですか」

「そう」

部長が頷くと、私は勇気を出してこう言う。

「私たちもしませんか？」

「なにを？」

「デートですよ！」

そう言ってから無性に恥ずかしくなって、私は両手で顔を覆った。

ちらと指の隙間から見た部長は、戸惑いながらもうれしそうにこう言う。

「ええーっと、それは、その、付き合ってくれるってこと？」

「はい。そうです」

私がそう言って頷くと、部長は「っしゃあああ」と拳を頭上高く付き上げる。

それからポケットにいつの間にか忍ばせていたものを取り出す。

パックの牛乳が２つ。

「これで、乾杯だな」

「そうくると思ってました」

私は笑顔で牛乳を受け取る。

ぬるい牛乳が、乾いた喉を潤す。

今日の牛乳が特別に美味しいのは、喉の渇きのせいだけじゃない。

部長が、好きな人が隣にいるからだ。